

日本海をめぐる弥生墳丘墓とその時代

野島 永（広島大学大学院人間社会科学研究科）

1. はじめに

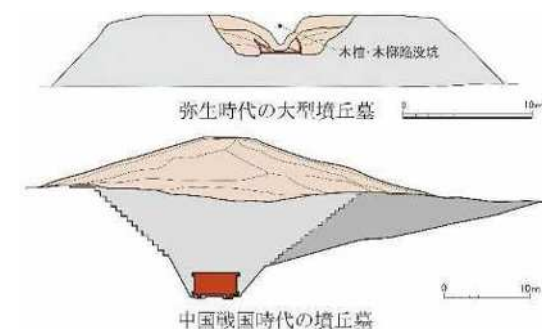
（1）弥生時代の年代観

近年の¹⁴C年代測定法AMSに基づく研究の進展からみれば、弥生時代（早期）の開始時期は紀元前9～8世紀に遡る。戦国時代の鋳造農具鉄刃の普及が紀元前4～3世紀であり、戦国時代の鋳造鉄刃の流入は前期末葉から中期初頭となるため、中期の開始は紀元前3世紀前半を前後する時期となろう。後期は王莽の新滅亡前後、紀元後1世紀前葉以降から倭国乱となる2世紀後葉までを3小期（初頭から前葉・中葉・後葉）に分ける。乱が収束した終末期は、いわゆる庄内甕の成立する庄内1～3式期ごろで、公孫氏政権が台頭する2世紀末葉から3世紀前葉ごろに位置づけられる。古墳時代の開始時期は布留0式を前後する3世紀中葉以降となる。弥生時代の墳丘墓が

大型化するのは1・2世紀ごろからのことで、弥生時代の最終段階にあたる。

（2）日本の墳丘墓の特徴

弥生時代中期から後期には、地域の首長層など社会的地位の高い被葬者のための墳丘墓を作ようになる。弥生時代の墳丘墓（弥生墳丘墓）は、中国戦国時代や漢代のように巨大な墓壙（墓穴）の上に盛土を施すのではなく、盛土を施した後に墓壙を穿ち、被葬者を木棺に入れて埋葬するようになる。墳丘頂部に被葬者を埋葬する手順（図5下、墳丘先行型の墳丘構築方法）は倭独自に発達していった墳丘墓の埋葬形態といえよう（図1）。それが大型化して古墳時代の前方後円墳などへと発展していった。



（図1）墳丘頂部に埋葬施設を設置する弥生墳丘墓

上図は島根県西谷3号墓、下図は湖北省荊門市包山2号墓をモデルとした模式図

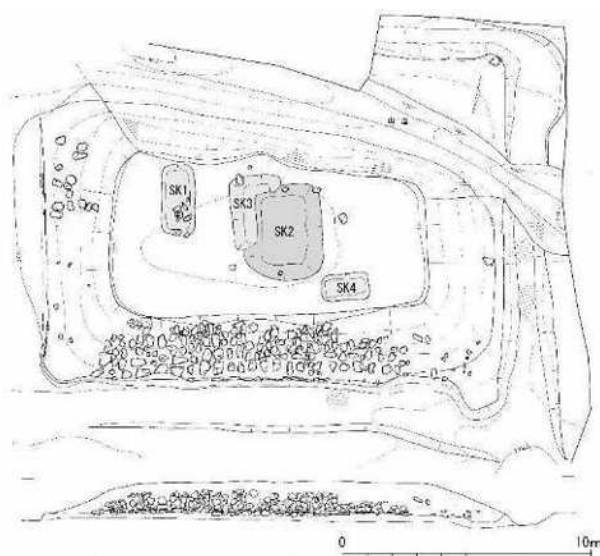


（図2）弥生時代中期中葉から後期初頭の方形貼石墓

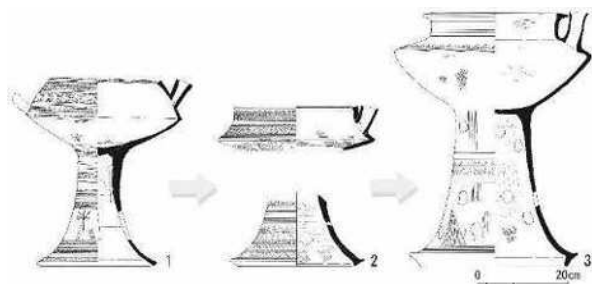
2. 四隅突出型墳丘墓の出現（中期後葉から後期前葉）

（1）日本海沿岸域における方形貼石墓

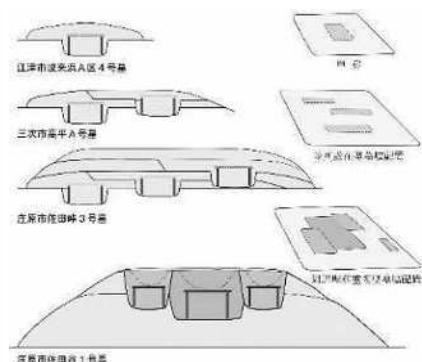
弥生時代中期中葉から後葉、広島県北部から山陰地方、京都府北部には埋葬施設を封土で覆い、封土周囲を貼石で方形に区画する貼石墓が成立する（図2）。この方形



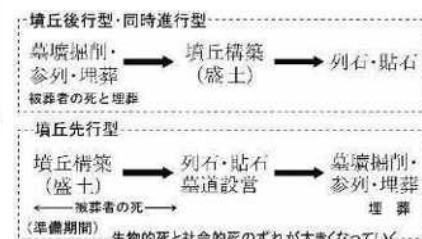
(図3) 広島県庄原市佐田谷1号墓平面・側面・断面図



(図4) 広島県北部三次・庄原地域の脚付鉢形土器の変遷



(図5) 墳丘構造の違いと葬送儀礼



(図6) 広島県庄原市佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構造

- 図4の1. 中期後葉〈三次市塩町遺跡〉
 図4の2. 中期末葉から後期初頭〈庄原市佐田峠3号墓〉
 図4の3. 後期初頭から後期前葉〈庄原市佐田谷3号墓〉

貼石墓分布域の西端、石見・三次地域では埋葬を行った後に小規模な墳丘を構築することから、「墳丘後行型」や「同時進行型」(図5上・中)の墳丘構築方法となる墳丘墓をみることができる。

(2) 佐田谷・佐田峠墳墓群の造営

弥生時代中期末葉、広島県北部の三次地域において、四隅突出型墳丘墓が造営されはじめた。いまだ同時進行型(図5中)の墳丘構築方法であり、複数みつかると木棺や石棺といった埋葬施設にも格差はみられず、墳丘裾部の供献土器も地元三次地域の塩町式土器であった。しかし、後期初頭には、三次地域の東隣となる庄原地域において、墳丘先行型の墳丘構築(図5下)となる大型の四隅突出型墳丘墓が出現した(図3、佐田谷1号墓)。墳頂平坦部という葬祭のための空間が設定された後に計画的な埋葬が可能になったことから(図6)、葬送儀礼をより壮大なものへと演出していく契機ともなった。このため、中核埋葬群を意識させる「周辺埋葬重複型」墓壇配置を行う埋葬手順が採用され、中心埋葬は大型化した(図5下)。佐田谷墳墓群では、大型墓壇をもつ中心埋葬(図3)、木棺を覆う木槨構造、墓壇上の立柱施設、赤彩装飾された葬祭専用土器(図4)の出現、棺槨の腐朽と陥没坑埋土への葬祭土器群や円礫の遺棄がみられた。葬祭土器は地元塩町式土器ではなく、伯耆地域の影響を強く受けた脚付鉢形土器や吉備地域の高坏が中心となっていた(野島・村田編2018)。このあと、四隅突出型墳丘墓は山陰地方伯耆地域から出雲あるいは因幡地域、さら



(図7) 弥生時代後期の石製玉生産

管玉くだたまの作り方が広く伝わった。管玉素材となる碧玉の分割には、四国中央構造線、三波川変成帯産の紅簾石片岩を使った。劈開へきかいが顕著なため、扁平な薄板（石鋸）にして碧玉素材に擦り込んで細長い溝を作り、楔くさびで形割りをした。これを繰り返して次第に小さな四角柱体にしていく。硬い碧玉の場合、調整剥離を施すが、多くは粗研磨を行い円柱状の管玉原体を作り、磨製玉錐（石針）による両面穿孔の後、仕上げ磨きで管玉の表面に光沢を出した（君嶋・河合編 2013）。石製玉作りは山陰・丹後・北陸・佐渡など日本海沿岸域だけでなく、近畿地方や東海地方にまで広がっていった。

しかし弥生時代後期には、鉄素材の供給量が増加し、小規模な鍛冶遺構が普及した。高温操作をとまなう鍛接技術や脱炭技術が未成熟であったことから、炭素量の高い輸入鉄素材は小型工具として工芸品生産に利用される場合が多かった（野島 2023）。山陰地方では、石製装身具の生産に鉄製工具が導入されるとともに水晶製小型算盤玉の生産を開始した。石製装身具の生産活動が対外交易物資の調達に深く関与しはじめると、玉生産自体が山陰地方西部と北陸地方西部に収斂していったことがわかる（図7）。四隅突出型墳丘墓を造営した地域首長たちは、鉄素材の入手、鉄製工具の開発によって石製玉生産の抜本的な改革を行った。またそれだけではなく、高級木器など首長層の好む新たな威信財の生産に努め、それらの贈与交換を通して地域間交流を活性化させていった。

弥生時代終末期、水晶製玉類の加工生産技術が筑前地域糸島半島に移植された。糸島半島中央部に位置する潤地頭給遺跡うるうちとうきゅうは、碧玉製管玉とともに水晶製算盤玉類を生産した伊都国の中核的玉作工房である（江野・江崎 2005）。山陰系土器や花仙山産碧玉素材が搬入されており、出雲地域から玉作工人が派遣され、鉄製楔・鑿や鉄製玉錐を駆使した加工技術を用いて、水晶製丸玉や小型算盤玉、碧玉製管玉類などを生産していたと推察された。独自の穿孔技術とともに製品の透明度が劣るところが倭の水晶製玉類の特徴といえる。もとは東南アジアの半透明ガラスによるカットビーズを真似たものであろう。パイロテクノロジーの低迷もあり、ガラス製品の代替ともなる水晶製装身具は倭の重要な対外交易品になった可能性が高い。『魏志』倭人条（正始8（西暦 247）年以降）には、「壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人、送政等還、因詣臺、獻上男女生口三十人、

には北陸地方越前・加賀・越中地域へと広がっていった。

3. 威信財経済の形成

（1）石製管玉生産

弥生時代になると、倭人たちは穿孔した玉を緒紐に連ねて首飾りや胸飾りを作った。勾玉には専ら新潟県糸魚川地域の翡翠ひすいが好まれた。管玉には、北陸（佐渡島猿八・石川県小松市菩提・那谷）で産出する濃緑色の碧玉とともに、緑色凝灰岩や赤い鉄石英が使われた。小さな算盤玉は半透明となる水晶や石英素材で作られた。中期になると、



(図8) 鳥取県青谷上寺地遺跡出土
水晶製小型算盤玉 (全長 5.2 mm)

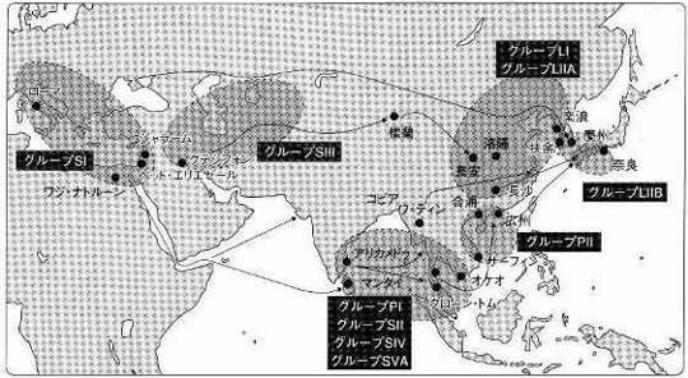
貢白珠五千孔・青大勾珠二枚・異文雜錦二十四。」とある。倭王壹與が魏に贈ったこの「白珠五千孔」は白色を呈し、珠緒を通す孔があり、かなりの生産量を見積もることができる。当時の倭の手工業生産を考慮すれば、やはり水晶製小型算盤玉(図8)を想定すべきであろう。このような水晶製算盤玉類の生産技術が一大率の常置した伊都国の湾港付近に直接移植されたということになる。水晶製算盤玉類が対外交易品や政治的貢賜関係の構築のための貢物として、国際交易港付近において専業生産されたのだろう。

(2) 輸入ガラスと2次生産

ガラスの生産には、二酸化ケイ素(SiO₂)やケイ酸塩鉱物の熔融が必要となる。これらの鉱物は融点が1,650℃前後と非常に高く、熔融が難しい。そこで融点を下げるフラックス(融剤)として酸化鉛やカリウム、ナトリウムなどを混ぜて加熱熔融し、着色剤を添加して有色ガラスを生産した。このため、基材と融剤、着色剤の違いから化学組成がそれぞれ異なってくる(表1・図9)。古代のガラス製品はその成分によって、鉛ケイ酸塩ガラス、カリガラス、ソーダ石灰ガラスに大別分類される。鉛ケイ酸塩ガラスには、二酸化ケイ素に酸化鉛を添加する鉛ガラス(LIIA)がある。引き伸ばしに難点があるため、管状に引き伸ばしてカットするビーズ(小玉)の生産には向かない。中国大陸の鉛鉱物が使用されていたことから、中国での生産が想定される。また中国には、酸

(表1) 古代ガラスの材質分類

田村・コト・大田(2010)・大田・田村(2016)			OGA and TAMURA, 2013	
鉛ケイ酸塩ガラス	鉛バリウムガラス		P50-KaB-SiO ₂ 系	L I 中国北東部・南部
	鉛ガラス		PbO-SiO ₂ 系	L II 中国大陸・韓半島(百濟)
アルカリケイ酸塩ガラス	カリガラス	中Alタイプ	K2O-SiO ₂ 系	P I 南アジア、コバルト着色、管引き伸ばし技法による小玉
		高Alタイプ	K2O-SiO ₂ 系	P II ベトナム北部・中国南部、銅(青銅)着色、管引き伸ばし技法による小玉
	ソーダ石灰ガラス	プロト高Alタイプ	Na2O-Al2O3-CaO-SiO ₂ 系	S IV 一部南～東南アジア、小型小玉の特徴
		高Alタイプ	Na2O-Al2O3-CaO-SiO ₂ 系	S II 南～東南アジア
		ナトリウムガラス	Na2O-CaO-SiO ₂ 系	S I 地中海沿岸、造粒技法
		低Alタイプ	Na2O-CaO-SiO ₂ 系	S III 中東～中央アジア、造粒技法
		ナトリウム主体ガラス	Na2O-CaO-SiO ₂ 系	S IV 南～東南アジア、コバルト着色



(図9) 古代ガラスの原産地 (田村 2020)

化鉛に酸化バリウムが含まれる特殊な鉛バリウムガラス(LI)がある。ともに弥生時代にもたらされていた。一方、カリガラスは二酸化ケイ素と酸化カリウムが主成分となるが、それに酸化アルミニウム、酸化ナトリウム、酸化カルシウムが数%の重量比で含有される。コバルト(紺色)や銅(淡青色・青空色)、マンガン(紫色)、鉄(アクアマリン・薄青色)などによって着色された。西アジアでは確認されないことから、インド、あるいは南方アジアに特有のガラスとみられる。大賀克彦氏らにより、弥生時代のガラス製小玉が南ア

ジアから東南アジアに源流をもつ IPB (Indo-Pacific Beads, Indo-Pacific Monochrome Drawn Glass Beads) であることが明らかになった (Francis, 1990; Oga and Gupta, 2000; Oga and Tamura, 2013)。ガラスを管状に細く引き伸ばして輪切りにし、再加熱して切断面に丸みをもたせた小さなビーズである。

弥生時代後期前葉から中葉、近畿地方北部 (丹後・丹波・但馬地域) の墳丘墓から出土したガラス製の小玉は、外径が 5～7 mm、小さいものでは 3 mm 前後、その多くは淡青色の IPB (P II) である。鉛同位体比が B 領域 (中国南部鉱山) となり (大賀・田村 2016)、含有された微量タリウムの産地が貴州省付近に絞込めることから、中国南部広西・広東省周辺で生産されたものとみられるようになった (小寺 2016)。丹後地域では、これまでに 10,000 点を超える淡青色の IPB (P II) が出土しており、丹後の地域首長たちが生産地からそれほど多くの媒介者を経ずに入手したと考えられている。丹後地域の首長たちは、カリガラスや鉛バリウムガラスを使って、ガラス製勾玉や管玉の 2 次生産を開始した。空豆形の勾玉は丹後地域に特徴的なもので、薄いガラス素材を研磨して成形した。管玉は整美な円筒型で、IPB (P II) を原料としたため、半透明で淡青色の色彩を呈した。不定形な複数のガラス片を半熔融状態になるまで加熱して融着させ、棒状のガラス塊を作り出し、石製管玉のように円柱状に研磨して穿孔した (大賀 2010b)。丹後地域の首長たちはこのようなガラス製管玉を但馬や因幡、越前など周辺地域との戦略的な交流・交易のための贈答品として利用したのであろう。後期中葉から後葉になると、さらに尾部全体が小さく先端が窄まるガラス製勾玉を鑄造生産しはじめた (小寺 2016)。丹後地域では、ガラスの加工技術が高かったわけではなかったが、ガラス原料 (IPB) の輸入とともに 2 次生産技術を向上させてガラス製装身具とし、装身具の荘厳化を図った。弥生文化に通有な勾玉や管玉の造形を遵守したことからすれば、伝統的な権威や正当性を維持しつつも、海外文明世界との繋がりを象徴するガラスの材質的価値を付加することで、これまでよりもさらに上位の威信財となる装身具の創出を実現したといえる (小寺 2016)。丹後地域では接続型の台状墓から単独化した大型方形台状墓の造営に向かい、四隅突出型墳丘墓に対峙した。丹後地域の首長たちは山陰地方とは異なる海上交易ルートを独自に開発しつつ、威信財装身具を周辺首長層に贈与して首長間の階層化を図り、方形台状墓の造営範囲を拡大したものとみられる。

つまり、山陰地方では、輸入した鉄素材を玉作用の鉄製工具として利用し、石製玉類の連なる装身具を生産し続けた。一方、丹後地域では、よりランクの高い首長にふさわしいガラス製装身具の



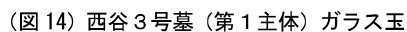
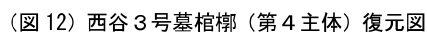
(図 10) 広島県三次市矢谷遺跡
出土ガラス丸玉

生産に傾注していったといえる。このような双方の装身具が西日本の主要遺跡や墳墓においてみつかることから、山陰地方や丹後地域の首長たちは首長層の装身に関わる威信財の生産に邁進し、地域首長間の贈与交換に利用していったことがわかる。

さらに、三次地域から出雲地域にかけては濃紺系のローマンガラスも見つかっている。広島県北部三次市の矢谷墳丘墓に隣接した周溝墓 MS 2 の中心埋葬、3 号木棺墓からは塩湖底に溜まる炭酸塩鉱物を含んだナトロン

島根県出雲市の西谷3号墓、水銀朱が塗り込まれた第1主体木棺底には、被葬者に着装されたガラス製大型管玉の胸飾りが出土したが、この大型管玉も一部ナトロンガラスであった。多量の酸化アンチモン (Sb_2O_3) が添加されていたという(図14右上、田村2015)。これも地中海のガラス素材が製品化され、それをさらに再度熔融して管玉に再加工したものとみてよからう。エジプトからはるばるもたらされた地中海の素材ガラスが加工をくり返して出雲・三次地域の2～3世紀の弥生墳丘墓に副葬されていたのである。その特徴的な成分からみれば、南アジア海域をはるかに越える国際海上交易の連鎖によってもたらされた遠方の貴重財であったと想像できよう。

(1) 四隅突出型墳丘墓の発展



(図 11) 島根県出雲市西谷 3 号墓測量図と調査区

丘墓だが、伯耆地域との交流を経て出雲地域において大型化した（図 11）。佐田谷墳墓群にみられた葬祭の儀礼的行為が受け継がれた。島根県西谷 3 号墓では、大型の墓壇に棺槨（図 12・13）を設け、ガラス製装身具（図 14）などを副葬した（渡邊・坂本編 2015）。山陰地方のほか、吉備地域や丹後地域、あるいは越前地域の首長の弔問を受け、「外交政策」をより重視する舞台演出を企図したとみられる。弥生墳丘墓はたんに被葬者の葬送にとどまらず、被葬者の社会的な地位と権限を継承した次代の地域首長が、弔問者の対等なカウンターパートとして、新たに社会的関係を取り結ぶ「場」でもあった。それを前提として贈与交換や婚姻による政治・経済的紐帯が継続したのだろう。墳丘墓の造営とは、遠隔地の首長との社会的関係を構築、あるいは更新、維持する絶好の機会でもあったと想像できよう。翡翠製勾玉や碧玉製管玉生産など玉作りに関わる日本海交易の結果、社会的関係を取り結ぶ「場」としての四隅突出型墳丘墓は北陸地方にまで波及したとみて間違いなからう。

日本海沿岸地域は紀元前後に勃興したユーラシア南方の海上国際交易の連鎖の最東端に位置した。東アジアからの金属資源だけでなく、遠く南方からのガラス資源をも入手した。日本海沿岸地域の首長たちは装身具資源を活用し、対外交易を活発化させて地域間交流を促進した。地域首長層の弥生墳丘墓はこのような長距離交易の活発化にともなって発展していったとみることができる。

（2）墳丘墓上の陥没坑とその葬祭

しかし、弥生時代には木材の加工技術や木棺板材を結合する緊縛技術に乏しかった。そのため、大型化した弥生墳丘墓は木棺や木槨が腐朽・崩壊し、ほぼ例外なく墳丘頂部に陥没坑を作り出すことになった（図 1 上）。陥没坑底の最深部からは、朱彩の磨製石製品や辰砂粉砕のための石杵といった石製器物がみつかる。島根大学で弥生墳丘墓の調査研究を主導した渡邊貞幸氏は、このような石製器物を「石主」と呼び、首長霊のシンボル（渡邊・坂本編 2015）、あるいは被葬者の魂

魄の依代（渡邊 2018）と想定した。埋葬施設直上の陥没坑底には、このような石製器物「石主」が配置されるか、あるいは破碎して埋め戻された（図 15）。当時の死の観念を確認することはできないものの、渡邊氏が想定するように埋葬施設の陥没に際して、被葬者が何らかの質的变化を遂げた観念されていたとみたい。依代の破碎を重視すれば、埋葬施設から被葬者の魂魄を解放する儀礼的措置であったと想像できる。人格ある死者を非人格的な祖霊へと昇華させるための葬祭があったとも考えることができようか⁽¹⁾。このような木棺・木槨などの腐朽・崩壊による陥没坑と埋め戻しの処

配置物	弥生墳丘墓の時期	中期 中葉	中期 後葉	後期 前葉	後期 中葉	後期 後葉	終末 期
	器物名						
木棺上標石							
陥没坑上部	円礫						
	円礫堆						
陥没坑底遺物「石主」	朱彩円礫						
	弧帯文石						
	石柱他						
	ガラス製玉類						
	鉄製刀剣・工具						
	舶載青銅鏡						
棺内・棺上副葬品	翡翠製勾玉						
	濃緑色系石製管玉						
	ガラス製勾玉・玉類						
	鉄製刀剣・工具						
	舶載青銅鏡						

（図 15）主要墳丘墓における石主・副葬品比較表

置は四隅突出型墳丘墓だけでなく、丹後地域における方形台状墓（赤坂今井墳丘墓）にもみられることとなった。瀬戸内海域東部においては突出部の付設された円形墳丘墓などにも引き続いた。後期後葉から終末期（2世紀から3世紀前葉）には、鉄器片や破砕された青銅鏡が石主として配置され、礫堆・礫敷で封じられた。

註1 弥生墳丘墓の研究はこれまで墳丘形態や規模、副葬品の多寡による類型化とその比較、副葬品の理化学的分析などが主流となっており、墳丘墓における葬祭の復元については低調である。ましてや木製棺槨の崩壊と陥没坑内の石製器物（石主）、陥没坑の処置、葬祭土器の遺棄状態については楯築墳丘墓や西谷墳墓群など一部の調査事例を除いてこれまでほとんど注目されてはこなかった。陥没坑を埋めた土層に焼土坑が検出され、追善供養のような葬祭があったとする調査事例がみられることから、今後、弥生墳丘墓における埋葬施設の陥没坑処置と石主の検出、葬祭土器群や礫堆・礫敷の配置に関わる調査情報を増やさねばならない。

参考・引用文献（抜粋）

- 石崎善久・岡林峰夫 2001『赤坂今井墳丘墓第3次発掘調査概要報告』京都府遺跡調査概報第100冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 今福拓哉 2012「弥生墳丘墓の埋葬施設と墳丘構築に関する研究」『広島大学大学院文学研究科紀要』第4号、広島大学大学院考古学研究室、83～100頁
- 今福拓哉 2016「備後北部の弥生墳丘墓 ―弥生時代後期前半を中心として―」『考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学考古学研究室50周年記念論文集・文集刊行会、259～272頁
- 宇垣匡雅編 2021『楯築墳丘墓』岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室
- 会下和宏 2015『墓制の展開にみる弥生社会』同成社
- 江野道和・江崎靖隆 2005『潤地頭給遺跡』福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査報告書、前原市文化財調査報告書第89集、前原市教育委員会
- 大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号、321～362頁
- 大賀克彦 2010a「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』No. 566、文化庁文化財部、27～35頁
- 大賀克彦 2010b「弥生時代におけるガラス製管玉の分類学的検討」『小羽山墳墓群の研究』研究編、福井市立郷土歴史博物館研究報告、小羽山墳墓群研究会、213～230頁
- 大賀克彦・田村朋美 2015「古墳時代前期のナトロングラス」『古代学』第7号、奈良女子大学古代学学術研究センター、1～11頁
- 大賀克彦・田村朋美 2016「日本列島出土カリガラスの考古学的研究」『古代学』第8号、奈良女子大学古代学学術研究センター、11～23頁
- 大川康広ほか編 2020『青谷上寺地遺跡』15、第17次発掘調査報告書、鳥取県
- 小澤正人 2007「荊州地区における楚俑についての一考察」『社会イノベーション研究』第2巻第2号、21～35頁
- 落田正弘編 1996『陣山遺跡』三次市教育委員会
- 尾本原勇人編 2000『宗祐池西遺跡発掘調査報告書』三次市教育委員会

河合章行編 2013『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 玉・玉作関連資料』9、鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 52、鳥取県埋蔵文化財センター

岸本直文 2014「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 185 集、国立歴史民俗博物館、369～403 頁

岸本直文 2022「庄内式の年代再考」『纏向学の最前線』纏向学研究第 10 号、桜井市纏向学研究センター、105～114 頁

君島俊行 2015『第 6 回 青谷上寺地遺跡フォーラム人・もの・心を運ぶ船～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる』鳥取県埋蔵文化財センター

君島俊行・河合章行編 2013『青谷上寺地遺跡フォーラム 2013：日本海を行き交う弥生の宝石』鳥取県埋蔵文化財センター

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』No. 566、文化庁文化財部、13～25 頁

小寺智津子 2016『古代東アジアとガラスの考古学』同成社

小寺智津子 2023『ガラスの来た道 古代ユーラシアをつなぐ輝き』歴史文化ライブラリー563、吉川弘文館

近藤 正 1972『仲仙寺古墳群』安来市教育委員会

近藤義郎 1986「前方後円墳の誕生」『日本考古学 変化と画期』岩波講座第 6 巻、岩波書店、172～226 頁

近藤義郎 1995『前方後円墳と弥生墳丘墓』青木書店

西条古墳群発掘調査団 2009「特別報告 兵庫県加古川市西条 52 号墓発掘調査の記録」『弥生墓からみた播磨』第 9 回播磨考古学研究集会実行委員会

坂本 稔 2022「較正曲線 IntCal20 と日本産樹木年輪」『纏向学の最前線』纏向学研究第 10 号、桜井市纏向学研究センター、301～308 頁

部 勇造訳註 2016『エリュトラ海案内記』1・2、東洋文庫 870・874、平凡社

妹尾周三編 1987『佐田谷墳墓群』広島県文化財センター調査報告書第 63 集、広島県埋蔵文化財調査センター

妹尾周三 1992「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代古備』第 14 集、95～115 頁

田中義昭・渡邊貞幸編 1992『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室

谷澤亜里 2020『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社

田村朋美 2013「松ヶ迫矢谷遺跡出土ガラス小玉の考古学的研究」『奈良文化財研究所紀要 2013』国立文化財機構 奈良文化財研究所紀要、70・71 頁

田村朋美 2015「西谷 3 号墓のガラス製造物の化学分析と保存処理」『西谷 3 号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第 14 集、出雲弥生の森博物館研究紀要第 5 集、島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館、179～187 頁

田村朋美 2020「古代日本とユーラシアーガラスビーズからみる交易」『ビーズでたどるホモ・サピエンス史 美の起源に迫る』昭和堂、83～96 頁

都出比呂志 1986「墳墓」『日本考古学 集落と祭祀』岩波講座第 4 巻、岩波書店、218～267 頁

寺村光晴編 2004『日本玉作大観』吉川弘文館

長野正孝 2015『古代史の謎は「海路」で解ける』PHP 新書

西嶋定生 1994『邪馬台国と倭国』古代日本と東アジア、吉川弘文館

野島 永編 2016『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告』調査編 (1) 広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第 3 冊・庄原市発掘調査報告書 28、広島大学大学院考古学研究室

野島 永 2023「弥生時代の鉄器と鉄器生産」『何が歴史を動かしたのか』第 2 巻、雄山閣、105～116 頁

野島 永 2025『弥生墳丘墓と手工業生産』考古学選書 6、同成社

野島 永・野々口陽子 1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓 (1)」『京都府埋蔵文化財情報』第 74 号、京都府埋蔵文化財調査研究センター、19～32 頁

野島 永・村田 晋編 2018『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告』研究編、広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第 4 冊・庄原市発掘調査報告書 30、広島大学大学院文学研究科考古学研究室

野田真弓・茶谷 満編 2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 木製容器・かご』1、鳥取県埋蔵文化財センター調査報告8、鳥取県埋蔵文化財センター

福永伸哉 2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会

藤尾慎一郎 2011『〈新〉弥生時代 500 年早かった水田稲作』歴史文化ライブラリー329、吉川弘文館

古川 登・森本幹彦ほか 2004『片山鳥越墳墓群・片山真光寺跡塔址』清水町教育委員会

古川 登編 2010『小羽山墳墓群の研究』研究編、福井市立郷土歴史博物館研究報告、小羽山墳墓群研究会

松本岩雄・渡邊貞幸ほか 2007『研究論集 四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

楊 娥琳 2021「原三国時代韓半島出土水晶製玉の製作と変遷」『韓国考古学報』2021-4、475～501 頁

古川 正 1998「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」『島根考古学会誌』1～20 頁

米田克彦 2000「碧玉製管玉の分類と碧玉原産地」『古代吉備』第 22 集、33～61 頁

米田克彦 2015「玉生産からみた山陰弥生社会」『古代文化』Vol. 67、72～82 頁

渡邊貞幸 2018『出雲王と四隅突出型墳丘墓』新泉社

渡邊貞幸・坂本豊治編 2006『西谷 2 号墓発掘調査報告書 出雲市大津町所在弥生墳丘墓の調査』島根大学考古学研究室調査報告第 8 冊、島根大学考古学研究室・出雲市教育委員会

渡邊貞幸・坂本豊治編 2015『西谷 3 号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第 14 集、出雲弥生の森博物館研究紀要第 5 集、島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館

Francis, P., Jr., 1990. Glass Beads in Asia Part II, Indo-Pacific Beads. *Asian Perspectives*, Vol. 29, No. 1, pp. 1-23.

McLaughlin, R., 2010. *Rome and the Distant East: Trade Routes to the Ancient Lands of Arabia, India and China*. Bloomsbury Publishing Plc.

Oga, K., and Gupta, S., 2000. The Far East, Southeast and South Asia: Indo-Pacific Beads from Yayoi Tombs as Indications of Early Maritime Exchange. *South Asian Studies*, Vol.16, pp. 73-88.

Oga, K., and Tamura, T., 2013. Ancient Japan and The Indian Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun Periods (3rd Century BCE - 7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, No.9, pp. 7-11, 35-65.

Wang, K., Jackson, C., 2014. A Review of Glass Compositions Around the South China Sea Region (The Late 1st Millenium BC to the 1st Millenium AD): Placing Iron Age Glass Beads from Taiwan in Context, *Journal of Indo-Pacific Archaeology*, 34, pp. 51-60.

挿図・表出典

図 1 小澤 2007 文献・渡邊・坂本編 2015 文献から作成。 図 2 方形貼石墓などの報告書から作成。 図 3 妹尾編 1987 文献。 図 4～6 野島・村田編 2018 文献。 図 7 碧玉・緑色凝灰岩製管玉、翡翠・蛇紋岩製勾玉、水晶製算盤玉等が出土した玉作生産遺跡の報告書から集成。 図 8 発表者撮影。 図 9 田村 2020 文献。 図 10 発表者撮影。 図 11～14 渡邊・坂本編 2015 文献。 図 15 各弥生墳丘墓報告などから作成。

表 1 大賀・田村 2016、肥塚・田村・大賀 2010、谷澤 2020、Oga and Tamura, 2013 から作成。

出雲・石見の弥生墳丘墓-松江市内を中心に-

今福拓哉（島根県古代文化センター）

はじめに

松江市の市街地を二分する大橋川は宍道湖と中海を結ぶ一級河川である。弥生時代には入海を結ぶ海上交通の主要航路であり、日本海交流における交通の要衝地であった。これを示すように当地周辺には四隅突出型墳丘墓が集中的に所在している。本報告では近年の発掘調査成果を中心に紹介し、これらの四隅突出型墳丘墓の特徴について整理したい。

1. 朝酌矢田Ⅱ墳丘墓の発掘調査

朝酌矢田Ⅱ墳丘墓は大橋川河川改修事業に伴い、令和5・6年度に発掘調査が実施されている。発掘調査の結果、墳丘や配石の大部分を失っているものの、四隅突出型墳丘墓と判明している。

（1）所在と立地（第1図） 松江市朝酌町所在。宍道湖から市街地を横切り中海へと流れ込む大橋川の北岸に位置しており、川幅が最も狭くなる地点の丘陵尾根上に立地している（第1図）。眼下は『出雲国風土記』嶋根郡条記載の「朝酌渡」推定地となり、発掘調査により実際に渡河地点と考えられる石敷遺構が検出されている（島根県教育委員会 2022）。古代の航路と陸路が交差する交通の要所であり、弥生時代においても入海と入海を結ぶ重要地点であったことが考えられる。このことから、朝酌矢田Ⅱ墳丘墓の被葬者がこの地を管理していたことを推測できる。

（2）墳丘規模（第2図） 削平により墳丘の大部分が失われており、正確な規模は不明である。ただし、貼石などの配石構造が墳丘東側で長さ約6.5m遺存しており、北付近で屈曲して外方へ張り出す様子が確認できている（第2図）。また、墳丘北側には東側の配石と直交方向に延び、両端が墳丘外方へ屈曲する溝状遺構（SX01）を検出している。SX01が周溝であった場合⁽¹⁾、主体部との位置関係から、方丘部が一辺6.0mとなり、突出部含む規模は一辺10mほどと推定できる。

（3）配石構造（第3図・写真1） 墳丘東側で配石構造が遺存していた。断面図から墳丘斜面への貼石とともに墳裾へ敷石、列石が施されていることを確認できる（第3図・写真1）。なお、貼石は部分的に1段確認できる程度である。敷石については礫長辺が墳丘に並行するように配置しており、列石はこぶし大程度の礫を墳丘方向へ角度をもって施されている状況が指摘できる。

（4）主体部（第2図） 遺存していた配石構造と並行するように1基確認している⁽²⁾（第2図）。平面形態は不整楕円形となり、長軸最大約2.3m、短軸最大約0.9mとなる。なお、削平を著しく受けており、深さは0.1m程度となっている。棺痕跡は未確認である。

（5）出土遺物（第4図） 朝酌矢田Ⅱ墳丘墓では土器が出土しておらず、主体部よりガラス小玉1点と鉄製工具が3点出土している（第4図）。すべて水洗による確認であるが、副葬品と判断できる。ガラス小玉（第4図1）は分析の結果、ソーダ石灰ガラスであることが判明。鉄製工具はヤリガンナ（同図2）と針状工具（同図3・4）であり、針状工具の副葬は珍しい。

（6）築造時期（第4図・第1表） 土器が出土していないため築造時期の詳細は不明瞭である。ただし、貼石・敷石・列石が確認できており、配石構造分類（松本 2003）としてはⅡB類となる。このようなⅡB類の配石構造をもつ四隅突出型墳丘墓は、松江市域でも弥生時代後期後葉以降に普

遍的に認められる。また、副葬された鉄製工具のうち、針状工具については対岸に所在する平所遺跡の後期後葉以降の玉作遺構で類似資料が出土している（第4図5～9）。これらのことから弥生時代後期後葉以降と想定したい。

2. 東百塚山 20 号墓の発掘調査

東百塚山 20 号墓は過去の調査（島根県教育委員会 2018）により四隅突出型墳丘墓であることが判明（島根県教育委員会 2018）していたが、墳丘規模や墳頂平坦面の詳細は不明瞭であった。そのため、様相把握のため令和 7 年度から島根県古代文化センターと島根県埋蔵文化財調査センターで発掘調査を実施している。発掘調査は現在も進行中。

（1）所在と立地（第1図） 松江市大草町所在。東百塚山 20 号墓は県下最大規模の古墳群である大草丘陵古墳群内に位置し、国史跡出雲国府跡と意宇川を挟んだ丘陵上に立地する（第1図）。意宇平野を一望できる丘陵上に築かれており、被葬者がこの地を管理していたことを推測できる。

（2）墳丘規模（写真2） 墳丘裾部で配石構造を確認し、これらから、墳丘長軸約 15m、短軸約 11mとなる。北東隅部において突出部を検出しており、突出部長約 4.0mとなる（写真2）。

（3）配石構造（写真3） 墳丘斜面の調査により配石構造を確認している。配石は墳丘斜面へ貼石、墳裾へ敷石・列石が施されている（写真3）。貼石については墳裾に付近で2・3段確認しており、斜面全体には施されていないようである。また、突出部稜線上から配石は認められず、築造当初より礫を敷設しない状況が推測できる。敷石は長辺と短辺で様相が異なり、短辺では墳丘に並行し、短辺では墳丘斜面に向けて石を配置している。列石は方丘部では石を立てているものの、突出部では隅部稜線に向けて角度をもって施されている状況が指摘できる。

（4）主体部 墳頂平坦面の調査により墓壙を複数検出している。墓壙検出に留めており、埋葬施設の詳細は不明であるが、埋葬施設の腐朽に伴う陥没痕跡も確認でき、木棺と想定できる。なお、陥没痕内部に堆積する土には土器が含まれており、埋葬に伴う供献土器と想定できる。そのほか、平坦面上では柱穴と考えられるピットを複数検出している。葬送儀礼に伴う墓上施設が存在した可能性もある。

（5）その他の遺構（写真4・5） 墳丘南側の斜面において土坑を検出しており、土坑内には完形の甕が据え置かれていた（写真4・5）。なお、土坑の時期としては墳丘墓築造時の造成面より掘り込まれていることから、墳丘墓と同時期のものと考えられる。このような墳丘外へ土器を配置する行為は同時期の松江市内の墳丘墓（間内越4号墓、来美1号墓など）でも確認されており、共通する葬送儀礼を採用していたことが考えられる。

（6）築造時期（第1表） 墳頂平坦面を中心に多量の土器片が出土している。現在、精査中であり詳細は報告書刊行時に譲るが、墳丘外土坑出土の甕が弥生時代後期後葉のものである。先述したように、土器埋納土坑は墳丘墓と同時期のものと考えられるため、東百塚山 20 号墓の築造時期も後期後葉頃と考えられる。

3. 大橋川周辺の四隅突出型墳丘墓事例

朝酌矢田Ⅱ墳丘墓および東百塚山 20 号墓という近年発掘調査が行われた四隅突出型墳丘墓について概要を記載した。ここでは両墳丘墓が所在する松江市大橋川周辺の類例を紹介する（第1表）。

（１）的場墳丘墓（第１・５図・写真６） 松江市八幡町所在（第１図）。削平により詳細は不明瞭であるが、東西約 8.0m、南北約 13.0m以上の墳丘規模をもつ（第５図）。墳丘斜面および墳裾には貼石・敷石・列石が施されている（写真６）。主体部は１基検出されており上面で供献土器が出土している。出土した土器は在地の土器のほか、赤彩された吉備系の土器も含まれている。築造時期は出土した土器より後期後葉と考えられている。

（２）間内越墳墓群（第１・６・７図） 松江市矢田町所在（第１図）。丘陵尾根上に４基の墳墓が確認されており、詳細調査を実施している１号墓は墳丘規模が長辺約 8.8m、短辺約 6.7mと小型であることが判明している^{（３）}。墳丘斜面には貼石が施されるが、敷石・列石は確認されていない。墳頂平坦面の詳細調査は実施されていないが、中央付近で墓壇上面へ集積された土器群が出土している。築造時期は出土した土器より終末期と考えられている。４号墓は部分的に調査が行われており、墳丘規模は東西 16.4m、南北 10.2mであることが判明している。配石は墳丘斜面に２・３段の貼石、墳裾に敷石と列石が施されている。主体部は未確認。築造時期は出土した土器より後期後葉～終末期と考えられている（池淵 2025）。

（３）来美墳丘墓（第１・８図） 松江市矢田町所在（第１図）。墳丘は削平を受けており、配石構造は不明瞭であるが、墳丘規模は東西約 10.0m、南北約 8.0mとなる（第８図）。墳頂平坦面では７基の主体部が確認されており、最大規模となる１号墓壇を取り囲むように周辺に配置されている。築造時期は出土した土器より後期後葉～終末期。

（４）東城ノ前墳墓群（第１・９図） 松江市西津田町所在（第１図）。４基の貼石を伴う墳丘墓を確認しており、このうち１・３号墓が四隅突出型墳丘墓と推定されている。１号墓は墳丘規模が東西 6.2m、南北 7.1mであり、墳丘斜面に貼石が施されている。築造時期は後期後半頃。３号墓は墳丘規模が東西 18.0m、南北 12.0mとなり、貼石が施されている（第９図）。１号墓同様に後期後半頃の築造。

４．大橋川周辺の四隅突出型墳丘墓の特徴

大橋川周辺の四隅突出型墳丘墓について、前章および第１表に概要を示した。これらの四隅突出型墳丘墓には下記に示すとおり共通する要素が存在する。大橋川周辺の四隅突出型墳丘墓の特徴として報告する。

（１）築造時期（第１表） 第１表で示したとおり、築造時期については後期後葉～終末期に集中していることがわかる。墳丘墓の分布図（第１図）をふまえると、大橋川周辺という限られた地域においてほぼ同時期に一斉に四隅突出型墳丘墓が築造されたことが想定できる（池淵 2025）。

（２）墳丘規模（第１表） さらに墳丘規模をみると、一辺 10m級の小型の四隅突出型墳丘墓が主体となっており、大橋川周辺でやや大型となるのは間内越４号墓、東百塚山 20号墓、東城ノ前 3号墓に限られる。ただし、これらの墳丘墓も長辺 20m以下となり、超大型・大型の墳丘規模をもつ出雲・安来地域と様相が異なることが指摘できる。

（３）配石構造（第１表・第 10 図） 四隅突出型墳丘墓の墳丘斜面および墳裾への配石については松本（島根県古代文化センター 2003）や岩橋（島根県教育委員会 2018）らの分類・整理が実施されている。これらに従い大橋川周辺の四隅突出型墳丘墓の配石構造を確認すると共通する配石構造をもつ墓が偏在していることがわかる（第 10 図）。なお、大橋川兩岸や意宇平野では貼石・敷

石・列石をすべて備える配石構造（ⅡB類）を共通して採用している。

おわりに

大橋川周辺地域の四隅突出型墳丘墓について、近年の発掘調査成果を中心にその概要を報告した。この中で、小規模な墳丘墓が後期後半に同時的に出現し、かつ配石構造の共有から複数のまとまりが抽出できることについて紹介した。四隅突出型墳丘墓が地域における各集団が造営した地域首長の墓であることを前提とすると、大首長墓が不明瞭な当該地域において、等質的な集団間において墓の造営や埋葬などの墓制を共有している状況が指摘できる。さらに、配石構造が偏在することから限られた地域の中でも複数の集団のまとまりが存在し、集団間の協力関係が存在していたこともうかがえる。このような集団間の協力関係の詳述については紙幅の都合上かなわなかったため、機会を得てあらためて報告したい。

註

（1）朝酌矢田Ⅱ墳丘墓の北側で検出された溝状遺構（SX01）から土器が出土せず、遺構上面で多量の須恵器甕片と弥生土器が1点出土している。このことから、SX01が墳丘墓に伴う周溝であることは明言しがたい。しかし、墳丘東側の配石に直交するように配置し、両端が外方へ屈曲することから本報告では墳丘に伴う溝として扱った。

（2）朝酌矢田Ⅱ墳丘墓では今回主体部として報告した遺構のほか3基の土坑を確認している。ただし、平面系形態が不整形であり、その性格は不明である。

（3）間内越4号墓については開発計画に伴う試掘調査によって確認された四隅突出型墳丘墓である。本調査に至らなかったため調査成果が公に刊行されていなかったが、池淵により近年資料化がされている（池淵2025）。

主要参考文献

池淵俊一 2025「間内越遺跡の再評価―間内越4号墓出土資料の紹介―」『島根県域における弥生社会の総合的研究』島根県古代文化センター

今福拓哉 2025「島根県域における弥生墓制の展開」『島根県域における弥生社会の総合的研究』島根県古代文化センター

近藤 正・前島己基 1972「島根県松江市の場土壙墓」『考古学雑誌』第57巻第4号

松本岩雄 2003「出雲の四隅突出型墓」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

岩橋孝典 2018「第4章 東百塚山古墳群の発掘調査」『上竹矢7号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳群調査報告書』島根県教育委員会

島根県教育委員会 2022『朝酌矢田Ⅱ遺跡』

松江市 2012『松江市史 史料編2 考古資料』

松江市教育委員会 1989『間内越1号墓・間内越遺跡』

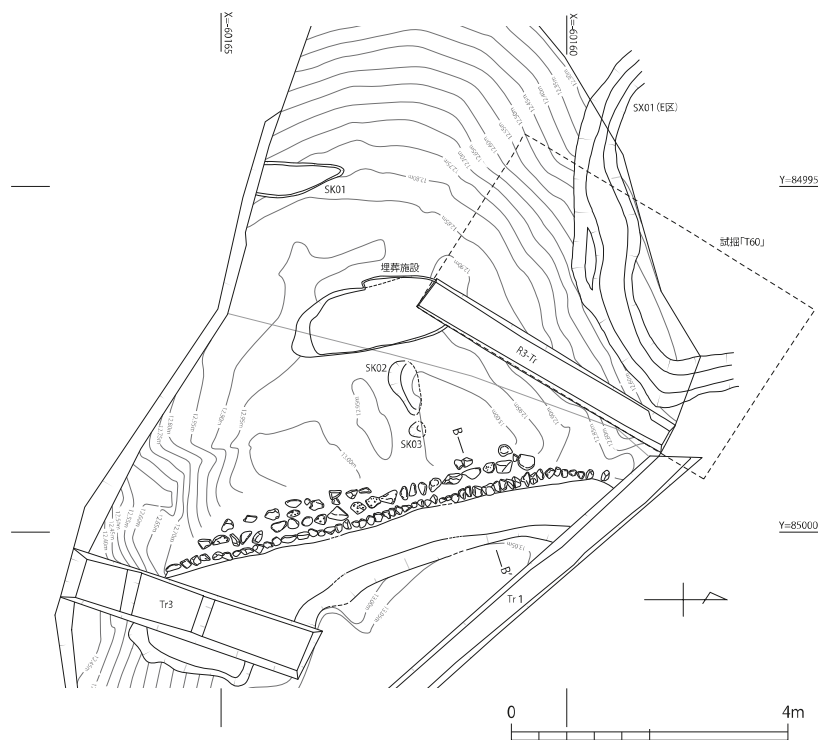
松江市教育委員会 2002「間内越遺跡範囲確認調査報告書」『平成13年度松江市内遺跡発掘調査終了報告書』

図版出典

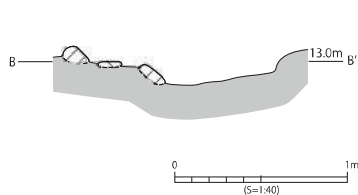
第1・10図：報告者作成、第2～4図：島根県埋蔵文化財調査センター提供、第5図：近藤・前島1972より一部改変、第6図・9図：松江市2012より一部改変、第7図：池淵2025より一部改変、第8図：松江市教育委員会1989より一部改変、写真1：島根県埋蔵文化財調査センター提供、写真2～5：島根県古代文化センター撮影、写真6：近藤正資料より（島根県古代文化センター所蔵）、第1表：報告書等より報告者作成



第 1 図 大橋川周辺の四隅突出型墳丘墓



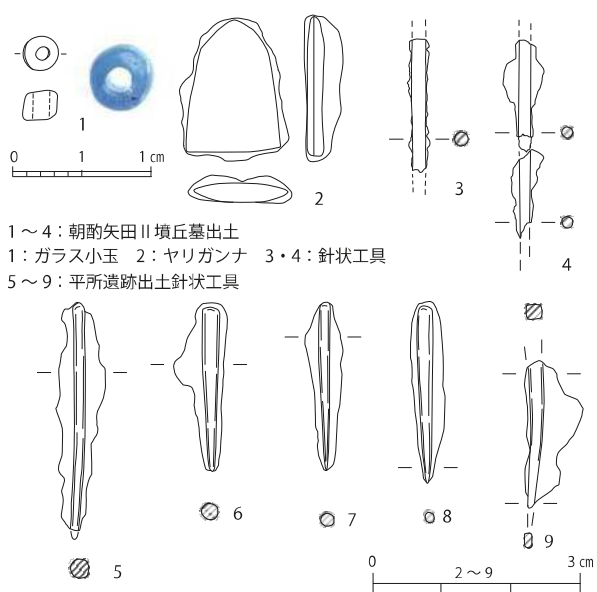
第 2 図 朝酌矢田Ⅱ墳丘墓 (S=1/100)



第3図 朝酌矢田Ⅱ墳丘墓配石断面図



写真1 朝酌矢田Ⅱ墳丘墓配石構造



第4図 朝酌矢田Ⅱ墳丘墓副葬品および類似資料



写真2 東百塚山 20号墓北東突出部検出状況



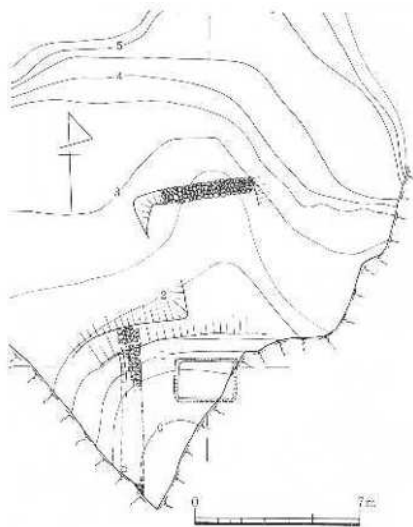
写真3 東百塚山 20号墓配石確認状況



写真4 東百塚山 20号墓墳丘外土坑検出状況



写真5 土器拡大



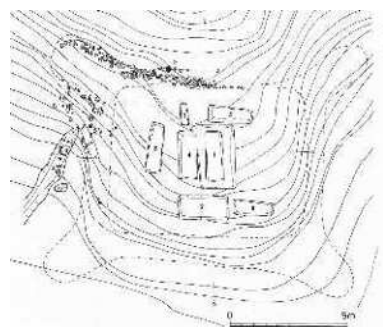
第5図 的場墳丘墓



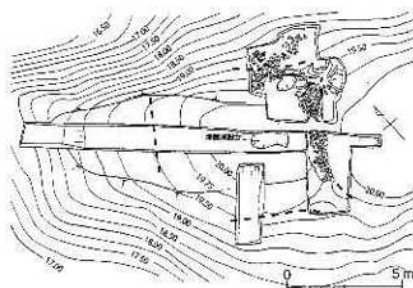
写真6 的場墳丘墓配石構造



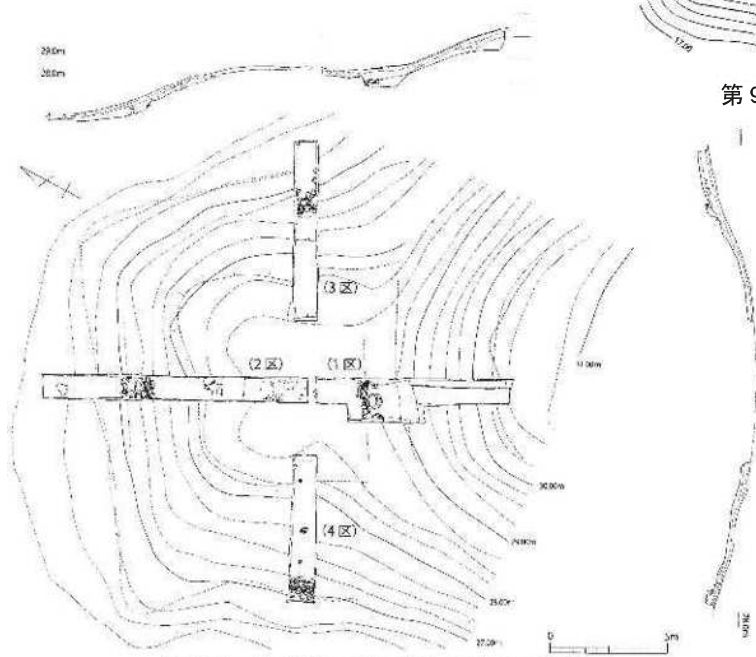
第6図 間内越1号墓



第8図 来美墳丘墓



第9図 東城ノ前1号墓



第7図 間内越4号墓

因幡・伯耆の弥生墳丘墓について

森藤徳子（（公財）鳥取県教育文化財団調査室）

1. はじめに

出雲と北近畿の中間地点である因幡・伯耆では、弥生時代中期後葉から終末期にかけて少なくとも 70 基の墳丘墓が確認されている。因幡・伯耆でみられる墳丘墓の形態は様々で、丘陵を削り出して墳丘を形成するものと溝により墳丘を区画するもの、貼石や突出部の有無により分類すると、「方形台状墓」「方形貼石台状墓」「四隅突出型方形貼石台状墓（以降、四隅突出型墳丘墓）」「方形周溝墓」に分けられる⁽¹⁾（森藤 2024）。本稿では、大山を境に伯耆を東伯耆と西伯耆に区分し、因幡を含めた 3 地域の墳丘墓について、墳丘墓の変遷と地域ごとの特徴について整理したうえで、因幡・東伯耆・西伯耆に隣接する地域との交流関係と「王墓」の出現について概観する。

2. 各地の様相

（1）西伯耆（県西部） 当該地域では、後期前葉から方形貼石台状墓と四隅突出型墳丘墓が見られる。尾高浅山 1 号墓は、米子平野東側の丘陵上に立地する四隅突出型墳丘墓で、規模は 9.7 m×7.1m、高さ 0.85m、墳丘裾部に敷石帯と立石を伴う（図 1－2）（米子市埋蔵文化財センター 2015）。埋葬施設は確認されていない。妻木晩田遺跡では、集落出現期の中期後葉の墳墓は確認されていないが、後期前葉以降、墓域と墳丘形態が移り変わりながら継続して墳丘墓群が造営される（長尾 2017、森藤・高尾 2020、森藤・大川 2024）。後期前葉の古い段階で洞ノ原地区において方形貼石台状墓と四隅突出型墳丘墓が築造される。2 号墓は、規模が 8.4m×6.9m、高さ 0.4m の方形貼石台状墓である。1 号墓は、規模が 6.5m×5.4m、高さ 0.3m の四隅突出型墳丘墓で立石は伴わない。3・4・7 号墓は 1 号墓よりも小型の四隅突出型墳丘墓で、6 号墓は 2 号墓よりも小型の方形貼石台状墓である。このほか、「子ども」用とみられる超小型の四隅突出型墳丘墓と方形貼石台状墓が点在する。いずれも墳丘盛土の下に埋葬施設があると見られ、ほとんど未調査のため棺や副葬品の様相は不明であるが、墓域で見つかった土器の中には、備後北部地域と関連付けられる土器が出土している（高尾 2020）。仙谷地区では、後期前葉の新しい段階に四隅突出型墳丘墓である仙谷 1 号墓を契機として造営が始まる。1 号墓の規模は 12.96m×12.22m、高さ 1.67m であり、洞ノ原地区の墳丘墓と比較して平面形は正方形に近く、規模・高さともに大型化している。墳丘裾部に敷石列と立石を伴う。埋葬施設は未調査のため副葬品の有無など様相は不明であるが、墳丘中央の盛土中から埋葬施設上面に置かれた標石の可能性のある自然石とともに後期前葉の土器が出土し、墳丘裾部では後期中葉の割合が高いことから、後期前葉から中葉まで埋葬が続いたとみられる（森藤 2024）。

後期中葉には、尾高浅山 1 号墓にほど近い場所で日下 1 号墓が築かれる（米子市教育委員会編 1992）。規模は 8 m×6.4m 以上、高さ 0.48m の四隅突出型墳丘墓で、5 基の埋葬施設を伴うが副葬品は出土していない。妻木晩田遺跡の洞ノ原地区では、四隅突出型墳丘墓である 8 号墓を最後に造営を終える。8 号墓の規模は 4.9m×4.4m、高さ 0.26m で墳丘裾部に立石を施す。仙谷地区では 1 号墓で埋葬が続き、同地区の別丘陵上で 3 号墓が築かれる。規模は 12.1m×8.6m、0.58

mの方形貼石台状墓で、墳丘内に 22 基の埋葬施設が確認された。第5埋葬施設で鉄鏃1点が副葬品として出土しているが、比較的規模の大きい埋葬施設を含めほとんど副葬品を伴わない。

後期後葉は、妻木晩田遺跡と吉備側に近い山間部で確認されている。妻木晩田遺跡仙谷地区の2号墓は、規模が7.4m×7.2m、高さ0.54mの四隅突出型墳丘墓であり、突出部が細長い形態で立石を伴わない。墳丘内外で見つかった5基の埋葬施設の内、墳丘中央の第1埋葬施設では頭部付近で朱の可能性のある赤色顔料が確認されているが、いずれの埋葬施設も副葬品は伴わない。仙谷5号墓は、規模が7.25m×6.8m、高さ0.96mの方形周溝墓であり、四隅で周溝が途切れて墳丘の内と外が陸橋状につながる形態をしている。墳丘内外で9基の埋葬施設が確認されたが、副葬品は出土していない。仙谷6・7号墳は、規模が10m未満で1～2基の埋葬施設を伴うが、部分的な調査のため詳細は不明である。日南町の矢戸鍵取免遺跡では、四隅突出型墳丘墓の突出部とみられる貼石とともに、吉備地域からの搬入品とみられる特殊壺・特殊器台の破片が出土している（日南町教育委員会編2010）。

終末期には、妻木晩田遺跡の仙谷地区から松尾頭地区に墓域が移り、継続して方形台状墓と方形周溝墓が築かれ、妻木晩田遺跡の東側や米子平野南の山間部では四隅突出型墳丘墓や方形貼石台状墓が築造される。妻木晩田遺跡仙谷地区の4号墓は、規模が12.93m×7.5m、高さ1.04mの方形台状墓だが部分的な調査のため埋葬施設等の詳細は不明である⁽²⁾。松尾頭地区では、終末期前半に3・4・5号墓、後半に1・2号墓が築かれ、いずれも仙谷5号墓と同様に墳丘の隅が陸橋状に墳丘内外とつながる方形周溝墓である⁽³⁾。3号墓は、規模が7.5m×7.4m、高さは0.34mから最大1.49mで、墳丘内で3基の埋葬施設が確認されたが、内部未調査のため副葬品等は不明である。墳頂部や周溝内からは吉備北部の影響を受けた土器が出土している。1号墓は、規模が10.3m×6.4m、高さ0.28m、墳丘内外で2基の埋葬施設が見つかり、墳丘中央の第1埋葬施設では副葬品として鉈1点が出土している。2号墓は、規模が10.7m×8.38m、高さ0.36mで墳丘内で3基の埋葬施設が見つかったが副葬品は出土していない。妻木晩田遺跡東側の丘陵上には、四隅突出型墳丘墓の可能性のある徳楽墳丘墓と方形貼石台状墓の可能性のある莊田2号墓がある。徳楽墳丘墓は、規模が19m×18.5m、高さ2mで埋葬施設などの詳細は不明である。円形の竹管文などで装飾された大型の器台などが多く見つかった（湯村2017）。莊田2号墓は一辺10mで埋葬施設などの詳細は不明だが、徳楽墳丘墓と同じ文様を施した器台の破片が出土している（山口2017）。東伯耆寄りの門前1号墓は、規模が10.1m×5.2m以上、高さ0.55mの方形貼石台状墓であるが、埋葬施設は検出されていない（中森・浜田・湯川2005）。山間部の父原墳墓群では、貼石を施さない四隅突出型墳丘墓の2号墓と、貼石が施された四隅突出型墳丘墓の1号墓が連続して造られる（長田2017）。2号墓は規模が11m×9m、高さ1mで4基の埋葬施設が見つかったが副葬品は伴わない。1号墓は規模が15m×13m、高さ1.8mで墳丘内において石棺状の埋葬施設が見つかったが内部未調査のため詳細は不明である。埋葬施設付近で吉備系土器を模倣した高坏が出土している。

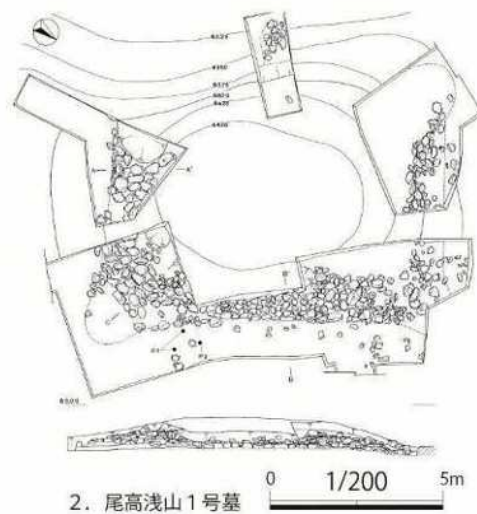
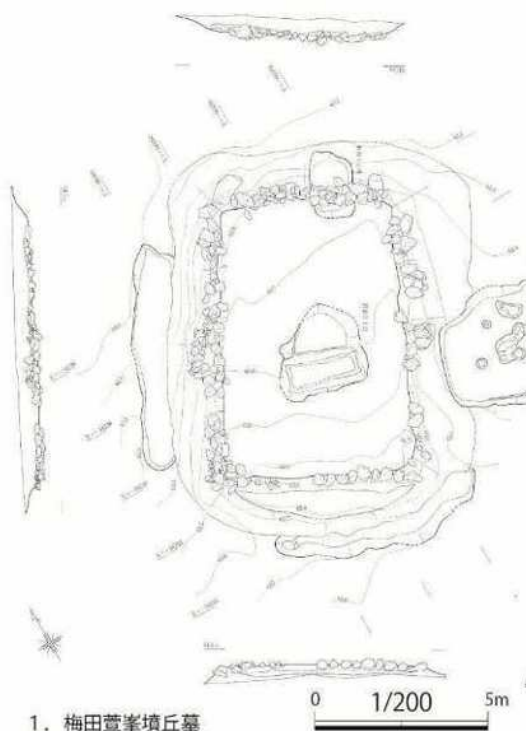
（2）東伯耆（鳥取県中部） 現時点で、3地域の中で最も早くに墳丘墓が出現した地域であり、中期後葉に東伯耆の西端にて、方形貼石台状墓の梅田萱峯墳丘墓が築かれる（湯村・濱本編2009）。規模は11.3m×8.6m、高さ0.44mで、各辺の墳頂部側の縁辺部に板石を貼る（図1－1）。墳丘築造前に土壙1基、木棺1基が設けられ、墳丘中央の木棺を囲むように北側のみ独立棟持柱を有

する柱列が確認された。柱は木棺の墓壙を埋め戻した後に墳丘の盛土の過程（墳丘完成前）に設置された後に抜かれており、最終的な盛土と貼石により墳丘が完成している。埋葬施設からは副葬品は出土していないが、墳丘周辺から出土した土器の中には絵画土器が含まれている。

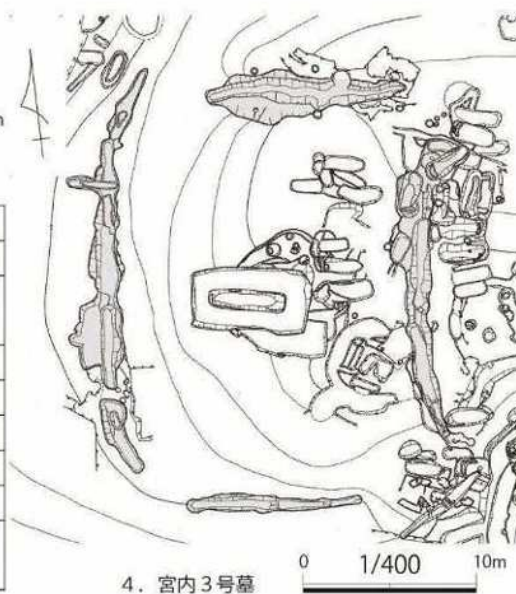
梅田萱峯墳丘墓に続くものは確認されておらず、後期前葉の終わり頃から倉吉平野にて墳丘墓の築造が始まる。後期中葉を中心に築造される阿弥大寺墳墓群では、3基の四隅突出型墳丘墓が連続して築かれる（図1-4）。1号墓は、規模が13.6m×7m以上、高さ0.8mであり、2号墓・3号墓は1号墓より一回り小さい。いずれの突出部も上面に大きめの石を並べ、細長く伸びる形態で、裾部には立石が巡る。1号墓では墳丘内に2基、墳丘外で12基の埋葬施設が検出されたが、副葬品は伴わない。

後期後葉になると、東伯耆の東端部である東郷池周辺にて宮内墳墓群、倉吉平野周辺にて柴栗墳丘墓、大谷・後口谷墳墓群、三度舞墳丘墓、東伯耆の西端である大山北麓にて湯坂1号墓が築造される。このうち、宮内1号墓と柴栗1号墓は四隅突出型墳丘墓、宮内2号墓と大谷・後口谷1号墓・2号墓は方形周溝墓、湯坂1号墓は方形台状墓、三度舞墳丘墓は方形貼石台状墓と、様々な形態の墳丘墓が見られる。宮内墳墓群は東郷池東側の丘陵上に立地し、終末期にかけて四隅突出型墳丘墓と方形周溝墓が築かれる（図1-3）（原田編1996）。切り合い関係から先に築造された2号墓は方形周溝墓で、規模は11.1m以上×5.4m以上、高さ0.55mであり、西伯耆妻木晩田遺跡の方形周溝墓と同様に、方形の墳丘の角は溝が途切れて陸橋状に墳丘外とつながる形態である。2基の埋葬施設が確認されたが副葬品は伴わない。四隅突出型墳丘墓である1号墓は、規模が17m以上×9.25m以上、高さ1.1mの墳丘内に5基の埋葬施設がある。墳丘中央の第1主体部では舟形底木棺の棺底に朱が敷かれ、鉄剣と大量の玉類が副葬されていた。第2主体部では鉄刀1本、第3主体部では玉類が副葬され、それぞれ棺底の一部に朱が敷かれていた。四隅突出型墳丘墓である柴栗墳丘墓は北西突出部のみが調査された（倉吉市教育委員会編1992）。周辺に木棺墓・土壙墓群が広がるが、墳丘に伴う埋葬施設は確認されていない。三度舞墳丘墓は、規模が21.0m×17.5m、高さ2.5mで方形貼石台状墓の可能性があり、墳頂中央部に拳大の川原石が敷かれ、その上に土器が置かれていたという（梅原1924、森下2017）。大谷・後口谷1号墓・2号墓は、宮内2号墓と同形態の方形周溝墓で、1号墓は、規模が13.7m×11.5m、高さ1.5m、墳頂部で5基、墳丘裾部や周溝内で10基の埋葬施設を伴うが、副葬品は出土していない（倉吉市教育委員会編1986）。供献土器に備後南部からの搬入品とみられる壺がある。湯坂1号墓は、墳丘を拡張しながら4基の木棺が設けられた方形台状墓で、規模は15m×5m、高さ0.6mであり、初葬のSX4では管玉38点が出土している（家塚・小山2005）。

終末期は、宮内墳墓群で方形周溝墓の造営が続き、倉吉平野では四隅突出型墳丘墓である藤和墳丘墓が見られる。規模は9.5m×8.5mで、墳丘中央部で丸底を呈する木棺が見つかったが副葬品は伴わない（湯村2017）。宮内3号墓は、規模が23.5m×17m、高さ1mで、2号墓と同様に墳丘角の周溝が途切れて陸橋状になる。墳丘内外で13基の埋葬施設が確認されており、墳丘中央の主体部は、刳拔式木棺で鉄刀1本が副葬されていたほか、墳丘中央付近のSX01とSX05でも鉄刀と玉類が副葬されていた。4号墓は終末期から古墳時代前期にかけて築造された方形周溝墓で、埋葬施設は墳丘中央の1基のみで副葬品は伴わない。



宮内墳墓群 副葬品等一覧				
1号墓	鉄製武器	玉類	朱	その他特記
第1主体部	鉄剣1	ガラス製管玉30、碧玉製管玉4、緑色凝灰岩製管玉1	○	舟底形木棺
第2主体部	鉄刀1	なし	○	朱は一部
第3主体部	なし	碧玉製管玉10、緑色凝灰岩製管玉3	○	朱は一部
3号墓	鉄製武器	玉類	朱	その他特記
主体部	鉄刀1	なし		刺殺式木棺
SX01	鉄刀1			
SX05	鉄刀1	碧玉製管玉1、緑色凝灰岩製管玉18、玉製管玉1 ※墓内土中からも出土		



- 【引用文献】
- 1 湯村・濱本編 2009
 - 2 米子市埋蔵文化財センター 2015
 - 3 原田編 1996
 - ※一部加筆、表は筆者作成
 - 4 倉吉市教育委員会編 1981

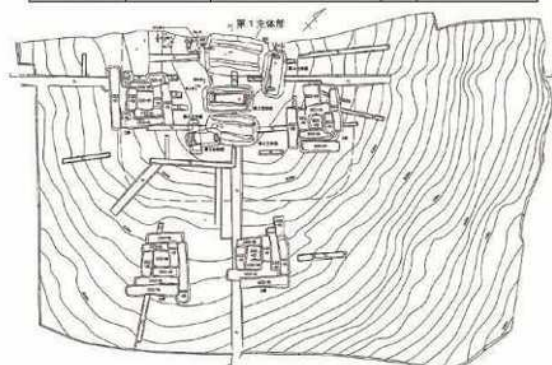
(図1) 伯耆の墳丘墓(抜粋)

(3) 因幡(鳥取県東部) 後期前葉に墳丘墓が出現し、終末期にかけて築造される。後期前葉の墳丘墓は、湖山池南岸の丘陵上に立地する方形台状墓の松原1号墓と、因幡の東端に立地する新井三嶋谷墳墓群である。松原1号墓の規模は16~17m×13.6m、高さ1.66mであり、墳頂部の平坦面で6基の埋葬施設が確認された⁽⁴⁾(図2-1)(谷口2012)。墳丘中央に並列する第1~3主体部は、棺底に水銀朱を確認し、最も規模の大きい第1主体部では墓壇上面に標石と墓上破碎土器供献が見られた。さらに、3地域の墳丘墓の中で全時期を通して最も多くのガラス製玉類を副葬する。新井三嶋谷墳墓群では、方形台状墓の2号墓と方形貼石台状墓の1号墓があり、特に1号墓については、規模が26.5m×18m、高さ3mと、この時期としては3地域の中で最も大きい(図2-2)(中野・松本2001)。墳丘斜面部は大量の貼石で覆われ、墳頂部では3基の墓坑が確認された。第1主体部は正方形の墓坑の2箇所で棺腐食による陥没坑が観察できたことから、一つの墓坑に2棺が同時埋葬されたと考えられる。陥没坑では墓壇上破碎土器供献とともに30点ほどの円礫や玉砂利が出土している。第3主体部でも陥没坑とそこから土器とともに玉砂利が出土している。なお、埋葬施設内は未完掘のまま史跡保存されたため、副葬品の有無や埋葬施設の構造は不明である。因幡東端のエリアでは、後期中葉以降、新井三嶋谷墳墓群に続く墳丘墓は未発見である。

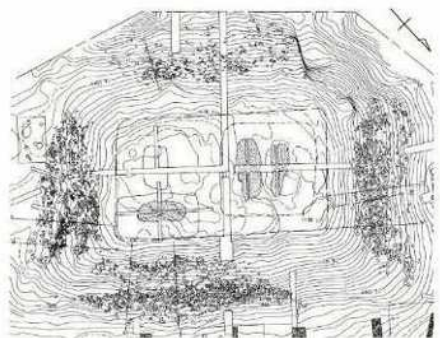
後期中葉になると鳥取平野縁辺の丘陵上や山間部入り口に方形台状墓が築造される。滝山猿懸平墳墓群では6~8.5mと小規模の墳丘が並び、1号墓の主体部では標石と土器供献が見られた(前田1999)。副葬品は2号墓の第2主体部において石枕とともに鈿1点出土した。門上谷1号墓は、規模が21.5m×15.5m、高さ1.1mの墳丘に26基の埋葬施設があり、墳頂部平坦面のほぼ中心に位置する長軸3mを超える最大規模の第3主体部が中心的な埋葬とされる(図2-4)(平川・湯村2017)。第3主体部は舟底形木棺、そのほかの木棺は組合式木棺で、第1・3・4・5主体部では棺底に朱が撒かれていた。また、第1・4主体部では標石を伴う。副葬品は、第1主体部でガラス製管玉14個、第3主体部で鉄刀1本、第12主体部でガラス製管玉2個が出土した。土器は、北近畿や北陸の特徴を持つものや畿内からの搬入品など、外来系の土器が多数みられる。門谷上墳墓群に近い下坂1号墓は、規模が一辺12m、高さ2mで6基の埋葬施設を伴うが、副葬品は持たない(中野編1990)。墓壇上や墳丘斜面で出土した土器は小片で、墓壇上破碎土器供献の可能性もある。湖山池周辺では、方形貼石台状墓である布勢鶴指奥1号墓が築かれる(図2-5)(中村・西浦・小谷1992)。墳頂部中央には木槨の可能性のある大型の埋葬施設があり、副葬品は伴わないものの棺底には水銀朱が撒かれ、成人男性とみられる骨片が出土している。土器の中には北近畿系のものが含まれ、墓壇上破碎土器供献されている。青谷上寺地遺跡と湖山池の間地点で確認された重山1号墓は方形貼石台状墓の可能性があり、規模は16.9m×12.5m、高さ2.48mで4基の埋葬施設が確認された(谷口2017b)。中心埋葬である第1主体部では木棺底の頭部の位置に水銀朱を確認したが副葬品は持たない。墓壇上土器供献があり、吉備系の土器が含まれる。

後期後葉の墳丘墓の分布は、湖山池周辺と千代川左岸から鳥取平野縁辺の丘陵上に集中する。四隅突出型墳丘墓の可能性のある西桂見墳丘墓は、規模が長軸で40m以上、高さ5mあり、3地域の全時期を通して最大規模の墳丘墓である⁽⁵⁾(図2-3)(加藤ほか1981)。墳丘の一部のみの発掘調査に留まり、埋葬施設や副葬品等の詳細は不明だが、葬送儀礼用の大型の土器が出土し

松原1号墓 副葬品等一覧				
	鉄製武器	玉類（全てガラス製）	朱	その他特記
第1主体部	鉄剣1	管玉17、小玉60	○	標石、供献土器
第2主体部	なし	勾玉19、小玉53	○	
第3主体部	鉄鏃2	管玉14+、小玉1006+	○	
第4主体部	なし	管玉16		



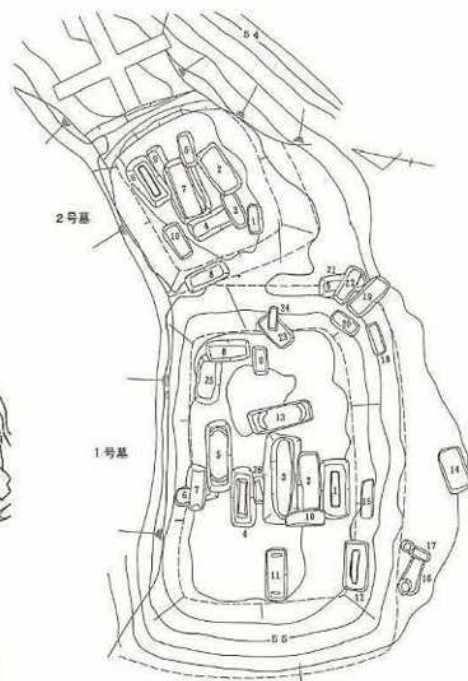
1. 松原1号墓



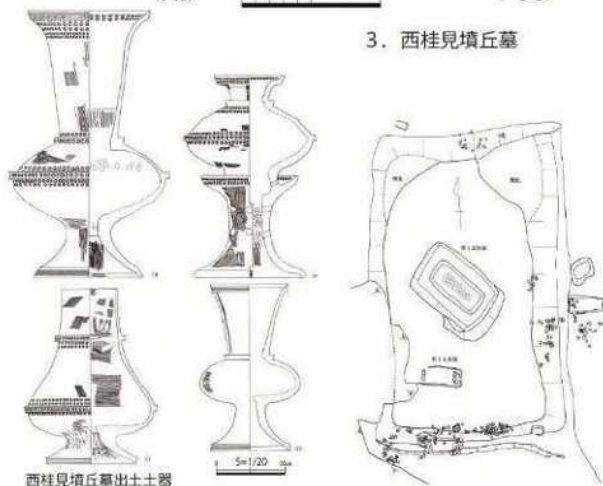
2. 新井三嶋谷1号墓



3. 西桂見墳丘墓



4. 門上谷墳墓群



西桂見墳丘墓出土土器

5. 布勢鶴指奥1号墓

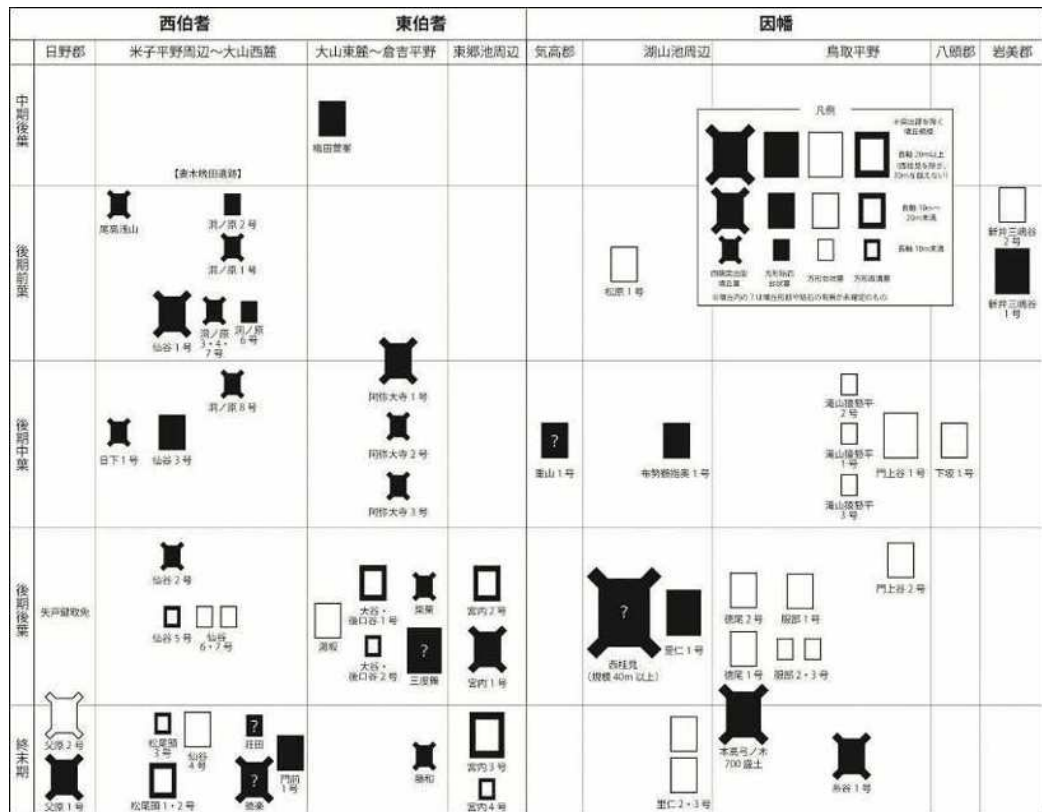
【引用文献】

- 1 谷口 2012
※表は筆者作成
- 2 中野・松本 2001
- 3 牧本 2017
- 4 平川・湯村 2017
- 5 中村・西浦・小谷編 1992

(図2) 因幡の墳丘墓 (抜粋)



(図3) 墳丘墓の分布



(図4) 墳丘墓の変遷

ており⁽⁶⁾、当該地域では他にない墳丘規模や供献された特殊な土器の存在から、この時期の首長墓としては最上位のものと考えられる。里仁墳墓群は1号墓を契機として終末期にかけて3基の墳丘墓が築造される(谷口 2017a)。後期後葉の1号墓は、規模が20.1m×17.4m、高さ2.1mの方形貼石台状墓であり、41基の埋葬施設を伴う。内、10基は墓坑上に標石があり、北近畿系の土器を含む土器供献がみられる。副葬品は、第8主体部で碧玉製管玉2個、第30主体部で碧玉製管玉1個、第37主体部で鉄鏃1が出土している。服部墳丘墓群と徳尾墳墓群は千代川左岸に面した丘陵上に立地する(谷口 2001、谷口 2009)。いずれも方形台状墓であり、規模は8m～16mと湖山池周辺と比較すると小規模で、ほとんど副葬品を持たない。服部3号墓では、第1主体部で鉄鏃4本が出土し、標石や土器供献を伴う。

終末期は、後期後葉から継続して里仁墳墓群で2号墓、3号墓が築かれる。いずれも方形台状墓で、規模はそれぞれ13.1m×11.6m、11.6m×10.4mと1号墓ほどではないが、2号墓の第1主体部では標石とともに副葬品として鉄剣1本を伴い、第2・4主体部では北近畿系土器を用いた墓壇内破碎土器供献がみられたほか、3号墓の第1主体部では鉄製品が1点出土した。本高弓ノ木遺跡で発見された四隅突出型墳丘墓(700 盛土)は、3地域の中で唯一の沖積地の墳丘墓であり、規模は23m×17m、高さ0.8mと西桂見墳丘墓を四隅突出型墳丘墓とすればそれに次ぐ大きさだが、埋葬施設等は検出できなかった(下江・濱田編 2013)。鳥取平野の東端の丘陵上には四隅突出型墳丘墓である糸谷1号墓が築かれる(森・松藤編 1994)。規模は14m×12mで、11基の埋葬施設を検出した。1号木棺墓では棺底は礫敷で、2号木棺墓からは鉄剣1本と鉈1点が出土している。

3. 各地域の墳丘墓の特徴

(1) 墳丘墓の出現と墳形の多様化 3地域の中で最も古い墳丘墓は、東伯耆の東端に位置する梅田萱峯墳丘墓であり、方形貼石台状墓である。地面に墓坑を掘り、遺体を埋葬した後に墳丘を構築しており、貼石は墳丘裾部から積み上げるのではなく墳丘斜面の上半部に貼付ける。盛土の途中に柱(覆い屋?)を建てて何らかの儀礼を行った後に、柱を抜き取って最終的な盛土と貼石により墳丘を完成させている。後続する墳丘墓は未発見で、後期前葉～中葉に東伯耆で造られる四隅突出型墳丘墓や、後期前葉に西伯耆、因幡で造られる方形貼石台状墓とは貼石の構造が異なることから、特定の地域の影響により単発的に出現したものとみられる。

3地域で墳丘墓が本格的に造営されるのは後期前葉以降であるが、墳丘墓の採用数は因幡と伯耆で異なる。遺跡数からみると、後期前葉～中葉では西伯耆2遺跡、東伯耆1遺跡と変化はないが、因幡は後期前葉で2遺跡、後期中葉で5遺跡と、後期中葉に墳丘墓の築造エリアが拡大する。採用される墳形は、因幡と伯耆で明確に分かれ、西伯耆・東伯耆では方形貼石台状墓と四隅突出型墳丘墓、因幡では方形貼石台状墓と方形台状墓に限定される。西伯耆・東伯耆では貼石を持つ墳丘墓に限られ、因幡では貼石を持たない方形台状墓が優勢である。

後期後葉になると、西伯耆では2遺跡と変化はないが、東伯耆では5遺跡に増加し、因幡では遺跡数は5遺跡と変化しないもののエリアは湖山池周辺から鳥取平野に集中する。西伯耆・東伯耆では後期中葉に引き続いて四隅突出型墳丘墓と方形貼石台状墓が造られるが、新たに墳丘の角の溝が途切れて陸橋状に墳丘外とつながる形態の方形周溝墓が出現し、全体の半数以上が貼石を

持たない墳丘墓になる。因幡では、四隅突出型墳丘墓の可能性のある西桂見墳丘墓と方形貼石台状墓の里仁1号墓以外は方形台状墓が優勢の状態が続く。

終末期には、西伯耆で最も多い5遺跡で墳丘墓が造られ、墳形も四隅突出型墳丘墓、方形貼石台状墓、方形台状墓、方形周溝墓と最も多様な状況になる。東伯耆は2遺跡で方形周溝墓と四隅突出型墳丘墓、因幡は3遺跡で四隅突出型墳丘墓と方形台状墓と、遺跡数と墳形は限られる。

（2）墳丘規模の変化 墳丘規模について、突出部を除く長軸の規模を比較すると、それぞれの地域で異なる状況がみられる。以下、因幡・伯耆の墳丘墓について、長軸規模 10m未満を小型、10m以上 20m未満を中型、20m以上を大型として各地域の状況を確認する⁽⁷⁾（図4）。

西伯耆では、後期前葉の初めは小型に限られるが、後期前葉の新しい段階で中型が出現して後期中葉まで継続する。出雲の西谷墳墓群で 50m級の墳丘墓が造られる後期後葉には、小型の墳丘墓しかみられない。終末期には再び中型の墳丘墓がみられるが、西伯耆では全時期を通して大型の墳丘墓は確認されていない。

東伯耆では、中期後葉に中型、後期前葉から中葉に小型～中型と変化は少ない。後期後葉以降は大型の墳丘墓がみられるが、後期後葉は三度舞墳丘墓（21m）、終末期は宮内3号墓（23m）と各時期1基のみで、ほとんどの墳丘墓が小型～中型である。

因幡では、後期前葉から中型～大型の墳丘墓がみられ、新井三嶋谷1号墓（26.5m）は当該期において3地域の中で最大規模の墳丘墓である。後期中葉には小型～大型まであり、規模の差が大きくなる。門上谷1号墓（21.8m）は当該期において3地域の中で最大規模の墳丘墓である。後期後葉も小型～大型と規模の差が大きい状態が続き、3地域の全時期を通して最大規模の西桂見墳丘墓（40m以上）が築造される。終末期は中型～大型の墳丘墓がみられるが、西桂見墳丘墓に続く 30～40m規模の墳丘墓は未確認である。

このように、3地域の墳丘規模を比較すると、大型の墳丘墓が出現する時期と地域は異なる。西伯耆は墳丘の大型化は進まず、全時期を通して規模による格差は少ない。東伯耆も西伯耆と同様に小型～中型が多く、後期後葉と終末期に1基ずつ大型の墳丘墓がみられる。一方、因幡は全時期に大型の墳丘墓がみられ、後期中葉以降、小型の墳丘墓も加わって規模による格差が大きくなり、後期後葉の西桂見墳丘墓で最大化する。

（3）副葬品の種類と数、供献土器の特徴 副葬品や埋葬施設上の供献土器にも3地域それぞれに特徴が表れる（図5）。西伯耆では、未調査の埋葬施設が多いため全容は明らかではないが、棺底まで調査された埋葬施設をみると、各墳丘墓の中で埋葬施設の位置や規模・構造的に上位であったとしても、ほとんど副葬品を持たない。鉄製武器の副葬は後期中葉の妻木晩田遺跡仙谷3号墓で鉄鏃1点が出土したが、刀剣類はみられない。終末期後半の松尾頭1号墓第1埋葬施設は、墳丘中央に設置された二段墓坑の木棺内の頭部付近で、柄の部分が意図的に巻かれた鉄製工具の鉈が出土している。墳丘墓に伴う供献土器を見ると、後期前葉の妻木晩田遺跡洞ノ原墳丘墓群では、備後北部の高坪などを模倣した土器が複数点出土している。後期後葉以降は、山間部の矢戸鍵取免遺跡や父原墳墓群で吉備南部からの搬入品や模倣品が出土している。終末期前半の松尾頭3号墓では、吉備北部の壺を模倣した土器が複数点出土している。

東伯耆も基本的には副葬品を持たないが、後期後葉以降、スポット的に副葬品を持つ墳丘墓がみられる。湯坂1号墓のS X 4では管玉38点が出土しており、ほとんどの管玉は直径 2.5 mm前後

と極細で北陸地方との関連が指摘される(小山 2005)。東伯耆の中で因幡に近い宮内墳墓群では、終末期にかけて継続的に鉄製武器や玉類が副葬される。副葬された鉄剣は長さ 71.4 cm、鉄刀は 58.4 cm～94.5 cmといずれも長大で、ガラス製管玉 30 点など玉類も豊富に出土した。墳丘墓に伴う供献土器については、後期後葉の大谷・後口谷墳丘墓群で備後南部地域からの搬入品とみられる大型壺がある(高尾 2020)。

因幡では、後期前葉から豊富な副葬品を伴う埋葬施設が多い。松原 1 号墓では、4 つの埋葬施設から大量の玉類や鉄製武器が出土した。鉄剣は 26.0 cm で鞘に納められていた。玉類は全てガラス製で、紺色カリガラスが含まれない点や引伸法により製作された淡青色カリガラス小玉が主体である点から近畿北部の特徴と類似すると指摘される(降幡 2012)。後期中葉には、門上谷 1 号墓において、最も規模の大きい第 3 主体部から鉄剣が出土したほか、第 1 主体部や第 12 主体部ではガラス製管玉が出土している。後期後葉から終末期にかけては、西桂見墳丘墓では中心的な埋葬施設の調査が行われていないため副葬品等の様相は不明であるが、同丘陵の桂見墳墓群の中には、鉄製品やガラス製勾玉などの玉類を副葬する土壇墓が確認されている。服部 3 号墓では鉄鏃 4 点が出土し、里仁墳丘墓群では、後期後葉の 1 号墓の複数の埋葬施設で玉類や鉄鏃が副葬され、終末期にも鉄剣などが副葬されている。墳丘墓に供献された土器の中で他地域に関連する土器は後期中葉以降にみられ、いずれも北近畿系・北陸系と因幡から東側の土器であり、一部で畿内からの搬入品が含まれる。その他の地域との交流を示すものとしては、因幡の中で東伯耆寄りの重山 1 号墓において吉備系の土器が出土している。

4. 他地域間交流と墳丘墓の展開

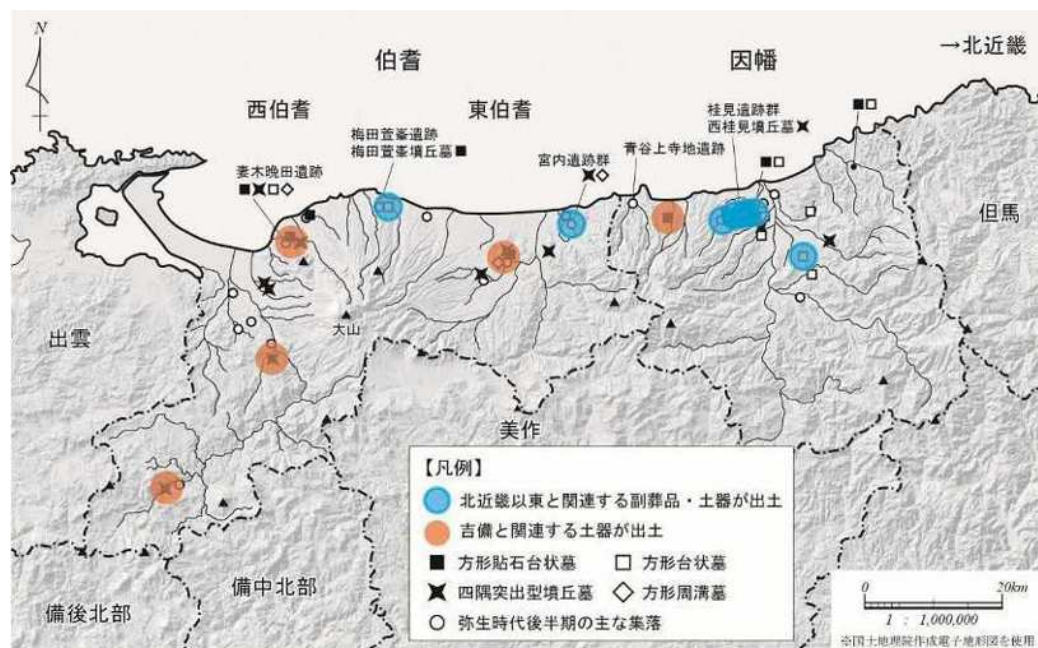
3 地域の墳丘墓の出現から終わりまでの変遷、墳丘形態・規模の変化、副葬品・供献土器の状況を整理した。最後に地域間交流の中で墳丘墓がどのように変化したのかみていく。

西伯耆から東伯耆にかけては、墳丘墓の出現期(中期後葉から後期前葉)は貼石を持つ墳丘墓(方形貼石台状墓や四隅突出型墳丘墓)のみで、後期中葉には東伯耆地域まで四隅突出型墳丘墓の分布域が拡大する。この時期の供献土器には、備後北部に影響を受けた土器が含まれており、四隅突出型墳丘墓の突出部の発達過程からみても中国山地山間部を中心とした西側地域との交流により墳丘墓が採用される。後期後葉以降も他地域との関連を示す供献土器は吉備南部や吉備北部など、西～南側の地域との交流がうかがえる。後期後葉になると方形周溝墓が出現し、貼石を持たない墳丘墓が増加するが、終末期まで貼石を持つ四隅突出型墳丘墓も残るなど墳丘形態は多様化する。一方で、墳丘規模は小型～中型で、出雲の西谷 3 号墓のように周辺地域では 50m 級の墳丘墓が出現する時期であっても大型化は進まない。墳丘内部の埋葬施設は伝統的な組合式木棺を採用するのみで、朱を撒く行為はほとんど見られず、鉄製品(特に武器類)や玉類を副葬しない点からみても、特に西伯耆については、現状では「王墓」まで階層化が進まない地域と言える。

ただし、東伯耆については、後期後葉以降、湯坂 1 号墓のように点的に北陸系の玉類が副葬される例があり、因幡に近い宮内墳墓群では鉄製武器と玉類を副葬し、中心的な埋葬施設では舟底形木棺と刳拔式木棺が採用され、棺底に朱が撒かれている。これらの墳墓は、外面的な墳丘形態は伯耆に多い四隅突出型墳丘墓や方形周溝墓である一方、副葬品や埋葬施設など内面的要素は因幡に類似する点は、因幡と西伯耆の境界で交錯する様相が見受けられる。

[illegible]

(図5) 副葬品と他地域と関連のある供献土器の出土状況



(図6) 副葬品・供献土器から見た交流関係

因幡では、墳丘墓が出現する後期前葉から終末期まで、北近畿以東と関連付けられる。墳丘形態は、後期後葉まで四隅突出型墳丘墓はみられず、北近畿に多い方形貼石台状墓と方形台状墓に限られる。後期前葉から中型～大型の墳丘墓が採用される点も伯耆とは異なる。後期前葉の松原1号墓でみられた多量のガラス製玉類と鉄製武器を副葬する組合せは、丹後地域との関連が指摘されている（谷口 2012）。門上谷1号墓では、鉄製武器とガラス製管玉が副葬されていたことに加えて、中心的な埋葬施設には舟底形木棺を採用し、棺底では水銀朱の塗布もみられたほか、供献土器には、北近畿系、北陸系土器、畿内搬入土器が含まれる。このほかの墳丘墓でもしばしば北近畿以東の土器が供献される。そして、後期後葉に3地域の中で最も規模の大きい西桂見墳丘墓が出現する。西桂見墳丘墓では北陸系の土器に因幡の独自性を組み合わせた祭祀用の土器が供献されている。因幡は後期前葉以降の北近畿以東との交流の中で「王墓」出現まで至ったと考えられる。

5. おわりに

本稿では西伯耆・東伯耆・因幡の3地域の墳丘墓について変遷と他地域との交流について見てきた。この3地域は出雲と北近畿との中間地点にあたり、他地域との交流の中で墳丘墓の築造について異なる動きを見せることがわかる。西伯耆は西側の地域との交流、東伯耆は墳丘墓が築造される前半期は西側の地域との交流、後半期は東側の地域の要素が混じるようになり、因幡は東側の地域との交流が強く表れている。その中で、西伯耆、東伯耆は墳丘の大型化は進まず、因幡のみ後期後葉に最大規模の墳丘墓が築造される。

しかし、鳥取県下では過去の発掘調査により、西伯耆では妻木晩田遺跡、越敷山遺跡、茶畑遺跡群など、東伯耆では笠見第3遺跡、因幡では青谷上寺地遺跡など、弥生時代後半期の大規模な集落や他地域との交流による文物が多数出土する交流の拠点的な集落が見つかっているが、いずれも西桂見墳丘墓のような卓越した墳丘墓は未発見のままである。今後の墳丘墓の発見により、より墳丘墓の様相が明らかになることを期待したい。

註

（1）本稿で用いる墳丘墓の分類については、妻木晩田遺跡で作業した墳丘墓の分類による（森藤・高尾 2020）。また、四隅突出型方形貼石台状墓は、貼石を持たない四隅突出型方形台状墓などを含めて一般的に広く浸透していると思われる「四隅突出型墳丘墓」を用いる。

（2）仙谷4号墓では、出土土器の中に瀬戸内西部（周防?）からの搬入品の可能性がある土器が出土している。

（3）松尾頭3号墓と1号墓の間には、道路により部分的に破壊されているため全容は不明ながら、墳丘墓の可能性が高いマウンド状地形が存在する。発掘調査により溝状の落ち込みを伴うマウンド状地形が確認され、後期後葉～終末期の土器とともに吉備南部地域から搬入された小型の特殊壺の破片が出土している（高尾・森藤 2020）。

（4）松原1号墓の墳頂平坦面から外れた墳丘斜面部と墳丘外の4箇所、10基程度の土壌が切り合う土壌墓群が伴う。いずれも副葬品を持たず、主体部との位置関係や埋葬施設の規模からして中心的な埋葬とは格差があり、構成員の集団墓とみられる。

（5）西桂見墳丘墓は一部の調査に留まり、墳形や規模について、報告書では突出部を含めた規模が約64～65mの墳丘墓とされているが（加藤ほか 1981）、40m以上の方形貼石台状墓と考えるものもある（名越 1992、松井 1996）。いずれにし

ても、3 地域で確認されている全時期の墳丘墓の中で最大規模である。

（6）西桂見墳丘墓出土の特殊土器は、北陸地方の土器に酷似したプロポーションを持ちながら加飾のパターンは因幡にみられるものであり、北陸地方との交流の中で因幡で製作されたものとされている（岸本 2001、松井 1997）。

（7）墳丘の規模については、今回取り扱う墳丘墓の規模から機械的に分類したものであり、これまでの研究で出雲などの地域で使用された規模の区分とは異なるため、今回の「大型」「中型」「小型」の区分は他地域のものと単純には対比できない。

参考文献

- 家塚英詞・小山浩和 2005『湯坂遺跡 福留遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 梅原末治 1924『因伯二國に於ける古墳の調査 鳥取縣史蹟勝地調査報告第二冊』鳥取縣
- 加藤 謙ほか 1981『西桂見遺跡』鳥取市教育委員会
- 倉吉市教育委員会編 1986『大谷・後口谷墳丘墓発掘調査報告書』
- 倉吉市教育委員会編 1981『上米積遺跡発掘調査報告Ⅱ ―阿弥大寺地区―』
- 倉吉市教育委員会編 1992『柴栗古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書 67
- 小山浩和 2005「湯坂 1 号墳丘墓出土の管玉について」『湯坂遺跡 福留遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 下江健太・濱田竜彦編 2013『本高弓ノ木遺跡（5 区）Ⅰ』鳥取県教育委員会
- 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』
- 高尾浩司 2020「妻木晩田遺跡における外來系土器の受容と地域間交流」『史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書 ―第 33・34 次発掘調査、墳丘墓群総括報告―』鳥取県立むきばんだ史跡公園
- 谷口恭子 2001『服部墳墓群』財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子 2009『徳尾墳墓群』財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子 2012『松原 1 号墓』財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子 2017a『里仁墳墓群』公益財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子 2017b『重山墳墓群』公益財団法人鳥取市教育文化財団
- 長尾かおり 2017『史跡妻木晩田遺跡仙谷墳丘墓群発掘調査報告書 ―第 25・26・27・29・30・31 次調査―』鳥取県教育委員会
- 長田康平 2017「父原墳丘墓群」『新鳥取県史 考古Ⅰ 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県立公文書館県史編さん室編
- 中野知照 1990『下坂 1 号墓』郡家町教育委員会
- 中野知照・松本美佐子 2001『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』岩美町教育委員会
- 中村徹・西浦日出夫・小谷修一編 1992『東桂見遺跡 布勢鶴指奥墳墓群』財団法人鳥取県教育文化財団
- 中森 祥・浜田真人・湯川善一 2005『門前第 2 遺跡（菰蒲田地区）』財団法人鳥取県教育文化財団
- 日南町教育委員会編 2010『矢戸鍵取免遺跡発掘調査報告書』
- 濱田竜彦 2009「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 149 集
- 原田雅弘編 1996『宮内第 1 遺跡 宮内第 4 遺跡 宮内第 5 遺跡 宮内 2・63～65 号墳』財団法人鳥取県教育文化財団
- 平川 誠・湯村 功 2017「門上谷墳墓群」『新鳥取県史 考古Ⅰ 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県立公文書館県史編さん室編
- 降幡順子 2012「松原 1 号墓出土のガラス製管玉・勾玉・小玉について」『松原 1 号墓』財団法人鳥取市文化財団
- 前田 均 1999『滝山猿懸平墳墓群』財団法人鳥取市教育福祉振興会

牧本哲雄 2017「桂見遺跡群」『新鳥取県史 考古1 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県立公文書館県史編さん室編

松井潔 1997「東の土器、南の土器 一山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態一」『古代吉備』第19集、古代吉備研究会

松井潔 2006「弥生時代後期の地域社会」『調査研究紀要』1、鳥取県埋蔵文化財センター

森 浩一・松藤 和人編 1994『糸谷古墳群』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室

森下哲哉 2017「三度舞墳丘墓（三度舞大将塚）」『新鳥取県史 考古1 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県立公文書館県史編さん室編

森藤徳子・高尾浩司 2020『史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書 一第33・34次発掘調査、墳丘墓群総括報告一』鳥取県立むきばんだ史跡公園

森藤徳子・大川泰広 2024『史跡妻木晩田遺跡仙谷1号墓発掘調査報告書 一第37次発掘調査一』鳥取県立むきばんだ史跡公園

湯村 功・濱本利幸編 2009『梅田萱峯遺跡V』鳥取県埋蔵文化財センター・国土交通省 倉吉河川国道事務所

湯村 功 2017「藤和墳丘墓」『新鳥取県史 考古1 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県立公文書館県史編さん室編

山口 剛 2017「荘田2号墓」『新鳥取県史 考古1 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県立公文書館県史編さん室編

湯村 功 2017「徳楽墳丘墓」『新鳥取県史 考古1 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県立公文書館県史編さん室編

淀江町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』

米子市教育委員会編 1992『日下古墳群発掘調査報告書』

米子市埋蔵文化財センター2015『米子平野の考古学資料 尾高浅山遺跡―弥生時代環壕集落遺跡と墳丘墓―』一般社団法人米子市文化財団

丹後における弥生墳丘墓について

高野陽子

((公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

1. 方形貼石墓の分布と時期

(1) 方形貼石墓二態 環日本海地域の弥生墓制(図1)の地域色は後期に顕在化し、山陰や北陸では四隅突出型墳丘墓が築かれ、丹後・但馬など近畿北部(以下、北近畿)では方形台状墓を特色とするなど、大きな地域色があることが知られている。こうした地域色は、弥生時代前期から中期の墓制にもみられ、前期～中期前葉には、山陰では配石墓やその系譜を引く墳墓が見られる一方、北近畿では埋葬施設の構築に石材を用いず、方形周溝墓が主体となり、一部で方形台状墓が築かれる。丹後では京丹後市カジャ遺跡、兵庫県豊岡市の駄坂舟隠遺跡など、丘陵上に立地しても、四周を有する方形周溝墓が展開する。そして、こうした様相が大きく変化する段階が弥生時代中期中葉であり、山陰と北近畿で大きく時期を違えず、方形貼石墓が出現する。しかしここでも、山陰では小規模な貼石墓から段階的に発達する過程がみられるのに対し、丹後では前代の系譜なく突如として墳丘に石材を多用する大形方形貼石墓が出現しており、大きく様相が異なる。

(2) 北近畿の方形貼石墓 方形貼石墓は、北近畿のなかでは14遺跡、丹後に7遺跡13例、但馬に1遺跡1例が確認されている(図2・3、表1)。丹後では、天橋立の砂州により形成された潟湖である阿蘇海へと注ぐ野田川の流域に、日吉ヶ丘S Z01(与謝野町)、寺岡S X56(与謝野町)、千原遺跡(与謝野町、2基)、難波野1号墓・2号墓(宮津市)が分布する。また、丹後半島北部の竹野川流域には、小池12号墓・13号墓(京丹後市)、奈具岡遺跡(京丹後市)で2基の例がある。さらに、丹後半島の東部周縁域にあたる由良川河口に近い志高遺跡で3基(舞鶴市)が確認され、南但馬の粟鹿遺跡(朝来市)においても1基を挙げることができる。

丹後の最古の方形貼石墓は、弥生中期中葉に位置づけられる与謝野町日吉ヶ丘S Z01である。墳丘の約三分の二が残存しており、長辺32m×短辺20m以上を測り、最大級の規模をもつ。その後も野田川流域には、中期後葉の難波野遺跡1号墓(一辺16m以上)、中期後葉～末の寺岡S X56(長辺33m)まで、15m以上の規模をもつ大形の貼石墓が築かれている。丹後の方形貼石墓は、出現からその終焉まで、天然の良港であった潟湖の阿蘇海沿岸とそこへ注ぎこむ野田川流域を中心に展開する。中期後葉以降、方形貼石墓は、丹後半島を内陸北部に竹野川流域の奈具岡遺跡や小池墳墓群へ、また丹後半島を東方へと海岸沿いに由良川河口に近い志高遺跡に拡がり、さらに由良川中流域から西方へと粟鹿遺跡にみる南但馬にも波及したと考えられる。

(3) 方形貼石墓と方形周溝墓 丹後の弥生時代中期後半の墓制は、方形貼石墓とともに方形周溝墓がその構成に含まれる。例えば志高遺跡では方形貼石墓群と方形周溝墓群のエリアが確認されるが、両者は近在し、中期中葉に先に方形周溝墓が出現し、中期後葉に方形貼石墓が築かれ、併行関係にある。志高遺跡は、いわゆる由良川・加古川の道を通じて近畿南部の文物の流入が多くみられる地域であり、大規模な方形周溝墓群の墓域が形成される点は、近畿南部の影響が色濃く現れたものと言える。日吉ヶ丘遺跡でも、方形貼石墓とほぼ近い時期に隣接して20m級の方形周

溝墓が築造されるが、丹後の方形貼石墓自体がいわば貼石をもつ方形周溝墓とも言えるものであり、周溝を有し、方形周溝墓との親縁性が高く、同一墓域に混在して立地する例もある。中期後葉を通じて両者は併存するが、方形貼石墓の墳丘規模は長辺 20～30m 級のものがあり、大形方形周溝墓の目安とされる約 15m を凌駕することから、丹後半島の弥生中期墓制の頂点に方形貼石墓があると言える。

2. 方形貼石墓の性格

(1) 方形貼石墓の由来の諸説 方形貼石墓は、山陰から中国山地にかけての石見・備後などの地域と、丹後を中心に展開するものと二つの大きな分布域があり、出現時期や相互の影響関係、さらに四隅突出墓との関係性が早くから検討されている(野島 1991)。貼石墓は、学史的には方形周溝墓や台状墓の発展形として成立したとする見解がある(和田 2003)。丹後の方形貼石墓の系譜については、与謝野町日吉ヶ丘遺跡の報告で検証され、石見の波来浜遺跡を丹後に先行する最古段階の貼石墓とみたうえで、首長間の交流により、石見・出雲から丹後へ波及した可能性が指摘されたり(加藤 2005)、また、近畿地方の方形周溝墓の影響を強く受け、山陰的な貼石墓と融合し、独自の周溝をもつ方形貼石墓が誕生したとする見解(肥後 2006)が出されている。一方、山陰では、「四隅突出型墳丘墓」については早くから朝鮮半島起源説が提唱されたが、具体的な影響関係が不明であり否定的な見方があったなかで、四隅突出墓に先行する中期中葉に遡る方形貼石墓の事例が石見の海岸部で判明するなど、方形貼石墓は弥生前期の配石墓の系譜と朝鮮半島南部の墓制にみられる「方形区画思想」の影響を受けて山陰や丹後などで多角的に発生したとする見解が出されている(藤田 2010)。

(2) 出現の背景 1999 年に発掘された日吉ヶ丘 S Z 01 は、中期中葉に出現するその当初から、墳丘の周囲に 3～4 段にわたる貼石をもつ完成した形態を備えており、墳丘が大きく発達した大規模な貼石墓として登場することが明らかとなった。前述したように、墳丘規模の小さいものから段階的に発達して大形化する山陰の貼石墓の様相と、丹後の出現の状況は大きく異なる。貼石についても、丹後の貼石墓は隅部に縦長に石材を用い稜線を際立たせているが、山陰の貼石墓は横長の石材を基底に用いて角をとり、四隅突出墓の踏石状石列につながる要素をもつことが指摘されており(藤田 2010)、また墳丘周囲に方形周溝墓と同様の周溝を持つ点でも、山陰で展開する方形貼石墓とは異なる特徴がみられる。

日吉ヶ丘 S Z 01 という丹後における最古最大の方形貼石墓出現の背景は、その系譜を周辺地域や環日本海地域に求めることが困難であり、完成された形態は何らかのモデルが存在することを示唆している。こうした方形の墳丘に石材を用いた墓制は、鉄製品などを通じた対外交渉の交易対象であった地域と推定される朝鮮半島南部の墓制が一つの候補となる。日吉ヶ丘遺跡の環濠集落からは多量の鉄製品が出土しており、多くはのちに「弁辰の鉄」として知られる朝鮮半島南東部地域の鉄素材に由来すると考えられている(野島 2009)。その洛東江流域の墓制には、方形墳丘に石材を多用した墓制があり、石積み基壇式の大規模な支石墓である昌原市徳川里 1 号支石墓(56.2 m×17.5m)や、方形周溝区画を接続する泗川梨琴洞遺跡などの例がある(図 7)。これらは無文時代中期の墓制であり、丹後の貼石墓とは時期的な隔たりはあるが、巨大石材を用いた墓域は集

団間の祭祀の場であり聖域であったとする見方があり、集団間で伝え残された墓制の情報に鉄資源の獲得を通じた対外交渉のなかで接し、その影響を受けた可能性がある。

(3) 方形貼石墓の性格 日吉ヶ丘遺跡の環濠集落は、やや小高い台地上に展開し、貼石墓の日吉ヶ丘 SZ01 は、環濠の一部を再掘削して築かれている。集落の入口部にあり眺望に優れた安定した台地上に占地されているが、貼石墓築造後の中期後半以降に利用された形跡がなく、その空間と墳墓は集団のなかで保護され、聖域化していた可能性がある。また、難波野遺跡 SZ01 は、阿蘇海と外海を隔てる天橋立の基部に位置し、海上を航行する船から遠望できる臨海性の立地がとられている。さらに志高遺跡では、方形貼石墓群は方形周溝墓群とエリアを異にし、船着き場と推定される遺構に隣接して築造されるという特徴をもっている。以上挙げたように、方形貼石墓は、これまでのところ、集落の入口や潟湖、川港など外部集団との交渉の場に隣接して築かれる例が多く、遠隔地交易や地域間交渉で接触する外部集団への視覚的な効果を意識し、占地されたとみることができる。

丹後における方形貼石墓の出現は、集団内の階層化の進展と、地域的なまとまりの形成を反映し、墳丘の形態や貼石の手法は、対外交渉や文化交流の結果として地域間で共有された要素である。貼石をもつ大規模な墓は、対外交渉や遠隔地交易を統括した被葬者とその地域集団を示す表象であり、外部集団から見られることを意識した立地をとることによって、集団の権威の表象として機能したと考えられる。日吉ヶ丘遺跡の方形貼石墓は、いわば始祖王の墓として創出された可能性がある。方形貼石墓は、山陰では(仁木 2007、今福 2021)、外来系墓制が最初に伝えられた石見の海岸部から、江の川を遡上して中国山地で定着し発展し、自然波及的な拡がりを示すが(図 6)、丹後の貼石墓は、その出現契機を異にし、鉄素材の獲得を中心とした朝鮮半島南東部地域との対外交渉の過程で、墳丘に石材を用いて荘厳化する方形区画墓の情報を得たことによって、新たな墓制として創出されたものではないか。地域集団と交易を統括する首長の対外的に示された権威の表象としての意味を、その出現当初の段階から有していたと考えられる。

3. 方形台状墓の時代

(1) 丹後の方形台状墓概観 方形台状墓は墳丘を階段状に削り出して構築するもので、北近畿の弥生時代後期を特色づける墳墓形態である。前・中期の墓制は、群形成が平面的・並列の関係であるのに対し、後期初頭の墓制は、段状地形を造り出すことで、高低差によって墓域を区分するとみることができ、墳墓の築造原理そのものが根本的に異なる。同一墳墓群のなかでも、埋葬施設の高さや占地による階層性と集団関係の表示があるとみられる(高野 2015)。

弥生後期の区画墓は、墓域の整形の在り方と墳形との関係性から、まず大きく3類に分けることができる。区画墓1類(図8)は、墳丘の整形が平面的・平例的な関係のもとに築造されるもので、弥生時代前・中期の墓制がこれに該当する。

区画墓2類(図8)は、階段状に整形することにより、高低差によって墓域の区分を行うもので、後期初頭にはじまる墓制がこれにあたる。階層や集団関係をより明確に表わす墓制と考えられる。区画墓2類は、さらに2類型に分けられることが可能である。一つは、集団墓として形成され、階段状をなす三坂神社墳墓群や、テラス部への埋葬など埋葬施設の高低差を明確にする左坂墳墓群

などの後期前半の集団墓である 2 A 類である（図 8）。これらの後期初頭から前葉の墳墓形態は、中期墓制の展開地域と全く異なる地域で出現するものであり、後期以降の墳墓の主形態であり、北近畿の特色であるいわゆる「台状墓」を特徴づける墓制である。一方、区画墓 2 類のもう一つの類型は、後期後半に出現する大風呂南墳墓群のような独立型の墳丘をもつ墳墓や、あるいは金谷 1 号墓のように、主墳の周囲を巡るテラスを設け従属的な埋葬施設を配する墳墓である（2 B 類）（図 10）。有力首長をいだく特定家族が集団墓から抜け出し墓域を形成したものと考えられる。大風呂南墳墓 1 号墓では裾部が削平され、また浅後谷南墳墓はテラス部が未調査であり同様に不明であるが、金谷 1 号墓のようなテラス面の従属的埋葬を伴った可能性がある。

区画墓 3 類は、赤坂今井墳丘墓の墳丘形態であり、丘陵の先端を大規模に切断して切り離し、墳丘裾部の整形を行い、一部盛土などにより、墳形を明確に意識したものである。赤坂今井墳丘墓は、墳丘の半分以上を盛土により整形した、整美な方形の墳丘を築成している（図 10）。

（2）区画墓の変遷 丹後の区画墓の築造には、2 つの画期を指摘できる。独立型墳丘をもつ大風呂南 1 号墓に対応する大風呂南 1 号墓を含む区画墓 2 B 類の登場と、列島の規模で墳形への意識が高まる動きに連動した赤坂今井墓にみる区画墓 3 類の出現である。後期後半でも早い段階の大風呂南 1 号墓の時期には、台状の尾根の平坦面の削り出しと深く掘削した溝による墓域の切り離しが注力されるが、墳形を強く意識した造成はみられず、明確な方形を志向する赤坂今井墳丘墓と明確に異なる。区画墓 3 類の出現は、各地における墳丘墓の展開と連動するものであり、古墳への階梯に到る墳墓の変遷において、列島的な動きのなかで理解すべき最大の画期となる。

4. 弥生後期墓制と遠隔地交流

（1）丹後の鉄 弥生時代後期前半の丹後・但馬地域の弥生墳墓からは、多くの鉄製品と多量のガラス玉が出土している。まず鉄製品では、京丹後市左坂墳墓群第 26 号墓第 2 主体部や同三坂神社 3 号墓第 10 主体部で、大陸製とされる素環頭鉄刀が出土したほか、後期前半の墳墓からは、朝鮮半島南部の鉄鍬の形式との関係が深い無茎の腸袂三角形式の鉄鍬などが数多く確認される（沓岐 2004）。また、後期前半の北近畿の墳墓に副葬された特徴的な鉄器である鉈は、朝鮮半島南部からの舶載品の可能性が高い兵庫県豊岡市上鉢山・東山墳墓群の出土例があり、野島永氏は北近畿でこの時期に鉄鉈の各形式が出揃うことから、地域内における生産の可能性が高いことを指摘している（野島 2009）。福島孝行は、こうした鉈の副葬は朝鮮半島南部にも特徴的にみられ、頭部の周辺に副葬される傾向があることなど、その副葬の在り方が類似することを指摘しており（福島 2000）、その習俗を含めた影響は人的移動を伴う可能性が高いことを示している。

（2）丹後のガラス 北近畿の後期前半の墳墓の副葬品として最も特徴的なものがガラス玉であるが、京丹後市大宮町の左坂墳墓群にみる約 6,000 個のガラス小玉の出土など、丹後で 10,000 点以上、但馬で 6,000 点以上のガラス製玉類が集積している。これに匹敵する地域は、福岡県のほか長崎県対馬や原の辻遺跡のある壱岐をあげるにすぎず、本州島では傑出した出土量である。丹後では、弥生時代中期後葉には、奈良岡遺跡を拠点として、地元で材料を得られる水晶を用いた玉作りが行われるが、後期前葉にはじまる石製玉類からガラス製玉類の嗜好の変化は、汎アジア的に 1 世紀以降に高まる動きと連動するとされ（大賀 2010、小寺 2016）、大陸との頻繁な交易を通

じて新たな情報を入手し、石製玉類から、より付加価値の高いガラス製玉類の生産に移行したと考えられる。

（３）供献土器 土器の形態にも関係性があり、朝鮮半島南部地域には、口縁が巾着状をなすいわゆる巾着壺と呼ばれる精製土器が分布するが、丹後では大風呂南 1 号墓の時期を中心に、これに類似した把手付小形無頸壺（いわゆるコーヒークップ形土器）が墳墓に供献される。黄橙色系に発色する極めて細かいミガキ調整が施された精製品であり、丹後で後期前葉に生み出された器種と考えられる、その後、この器種は北陸へ波及するが、山陰にはほとんど拡がりをみせず、山陰東部の最高首長墓の供献土器として確認されるにとどまる。朝鮮半島の巾着壺と呼ばれる精製壺と形態が類似し、色調もまた橙褐色、黄褐色に発色するものが多く、朝鮮半島南部地域との交流を示す資料とみている。

（４）首長墓間の交流 山陰と丹後の墳墓との併行関係について、大山式の最も新しい段階とみる大風呂南 1 号墓と、因幡の四隅突出型墳丘墓とされる西桂見墳丘墓が、出土土器の様相から後期後半の早い段階にあり、おおそ併行関係にあるとみている。また、東伯耆でもこの時期には、中国製と推定される長刀を副葬し、舟底状木棺を導入する宮内第 I 遺跡 1 号墓や、同 3 号墓が出現しており、大風呂南 1 号墓の時代には、山陰西部の出雲よりも、丹後と因幡・伯耆との地域首長間の関係性には強い緊張関係があるとみられる。一方、赤坂今井墓は、供献土器の年代観から、西谷式の最新相である弥生時代後期末に位置づけられ、出雲最大の王墓であり、北近畿系土器が供献された四隅突出型墳丘墓の西谷 3 号墓は、現状では丹後における王墓の空白期にその時期が対応すると考えられ、出雲と交流を進めた丹後地域王権の実態はまだ明らかにはされていない。

一方、赤坂今井墓では、首長の葬送にあたって、在地の土器に混じって北陸や東海、瀬戸内東部など、多くの外来系土器が供献土器として出土しており、各地の首長層と交流を進めたことが明らかである（高野 2000・2021）。赤坂今井墓に先行する段階には、西谷 3 号墓の北近畿系土器の出土から、北近畿と出雲との首長間の交流があったと考えられるが、伯耆・因幡ではこうした様相はみられず、いわば「遠交近攻」的な地域関係が窺われる。赤坂今井墓の段階に、外来系土器のなかでも特に注目されるのは、被籠土器とよばれる縦に突帯をもつ東海系土器であり、東方の地域との関係を深めていたことの証左である。この時期、丹後は主要な墳墓において、鉄剣が副葬され、鉄製武器の出土量が他地域に比して突出する時期であり、その被葬者は鉄器の供給を通じて、東方地域との関係性を深め、地域勢力を拡大したと考えられる。

参考文献

- 宅岐一哉 2004 「弥生時代鉄鏃副葬の展開とその特質」『古代学研究』167 古代学研究会
- 石崎善久・岡林峰夫他 2004 『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』 峰山町教育委員会
- 今福拓哉 2021 「山陰弥生墳丘墓の発達過程について」『島根考古学会誌』第 38 集 島根考古学会
- 大賀克彦 2010 「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』No.566
- 加藤晴彦編 2005 『日吉ヶ丘遺跡』加悦町文化財調査報告第 33 週 加悦町教育委員会
- 金 賢・崔鐘圭他 2003 『泗川梨琴洞遺跡』慶南考古学研究所
- 小寺智津子 2016 『古代東アジアとガラスの考古学』 同成社

白数真也・肥後弘幸他 2000『大風呂南墳墓群』 岩滝町教育委員会

高野陽子 2000「弥生大形墳丘墓出現前夜の土器様相」『季刊考古学別冊 10』 雄山閣 2

高野陽子 2015「2, 3 世紀の丹波と山陰」『大集結邪馬台国時代のクニグニ』 青垣出版

高野陽子 2021「古墳出現前夜における丹後地域王権の「畿内」交渉」『京都府埋蔵文化財論集』第 8 集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

仁木 聡 2007「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

野島永 1991「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」(『京都府埋蔵文化財論集』第 2 集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

野島 永 2009 初期国家形成過程の鉄器文化』 雄山閣

肥後弘幸 2006「引き継がれた墓制—近畿北部型弥生時代後期墓制前史—」『京都府埋蔵文化財論集』第 5 集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

肥後弘之 2010「方形貼石墓概論」『京都府埋蔵文化財論集』第 6 集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

福島孝則 2000「弥生墳墓における甕の副葬作法 (一) 丹後地域」『京都府埋蔵文化財情報』第 78 号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

藤田憲司 2010『山陰弥生墳丘墓の研究』株式会社日本出版ネットワーク

和田清吾 2003「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究—葬制の比較研究—』真陽社

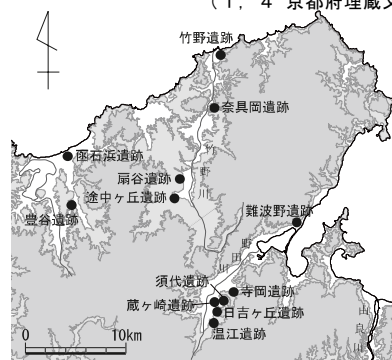
李相吉・竹末純一訳 1993「韓国昌原徳川里遺跡発掘調査概要」『古文化談論叢』32 九州古文化研究会



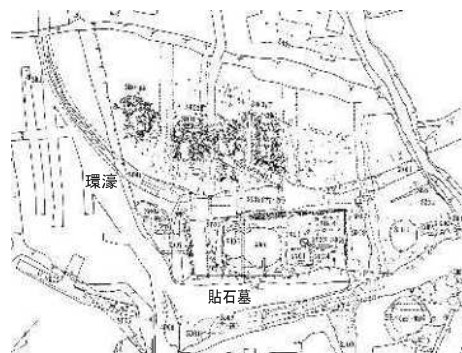
(図 1) 環日本海の弥生後期土器の地域圏

	遺跡名	遺構名	墳丘規模（m）	周溝	埋葬施設	時期	備考
野田川流域	日吉ヶ丘遺跡	SZ01	32m×20m以上	あり	1基 （組合式木棺）	中期中葉	管玉677点（碧玉、 緑色凝灰岩）、朱 遺跡内に方形周溝墓
	寺岡遺跡	SX56	33m×20m	あり	3基 （組合式木棺）	中期後葉～ 末	貼石は原位置不明
	難波野遺跡	1号墓	16.2m×7.8m以上	あり	不明	中期後葉	
		2号墓	6.0m以上×1.5m以上	あり	不明		
	千原遺跡	グリッド16 グリッド27	2.9m以上 3.4m以上	あり 不明	不明 不明	中期後葉？	部分検出
竹野川流域	小池古墳群	12号墓	不明	不明	不明	中期後葉	
		13号墓	6.5m×3.7m	なし	2基		
	奈具岡遺跡	方形区画1	16m以上×6.1m以上	あり	不明	中期後葉？	遺跡内に方形周溝墓
		方形区画2	5.4m以上×1.6m以上	あり	不明		
田良川流域	志高遺跡	1号墓	9m×6.3m	あり	2基以上	中期後葉	遺跡内に方形周溝墓
		2号墓	15.5m×2.2m以上	あり	不明		
		3号墓	9m×6.3m	あり	3基		
南伯馬	栗鹿遺跡	方形貼石墓 ESX01	13.2m×9.3m	あり	不明	中期後葉	

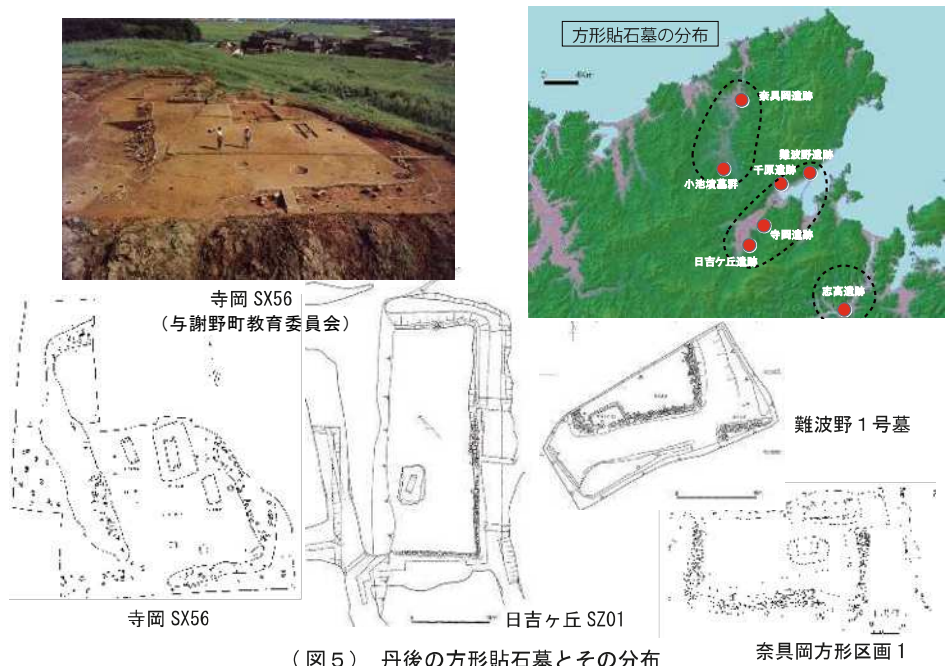
（表1）北近畿の方形貼石墓



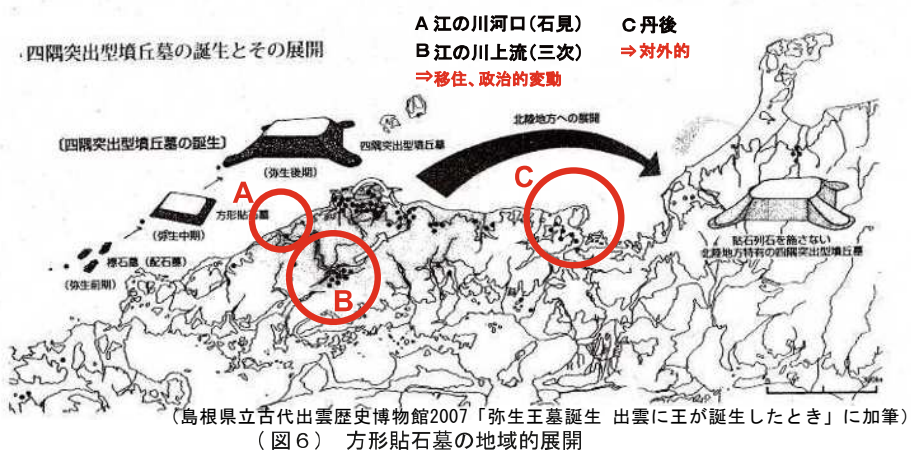
（図2）丹後遺跡地図（弥生前期・中期）



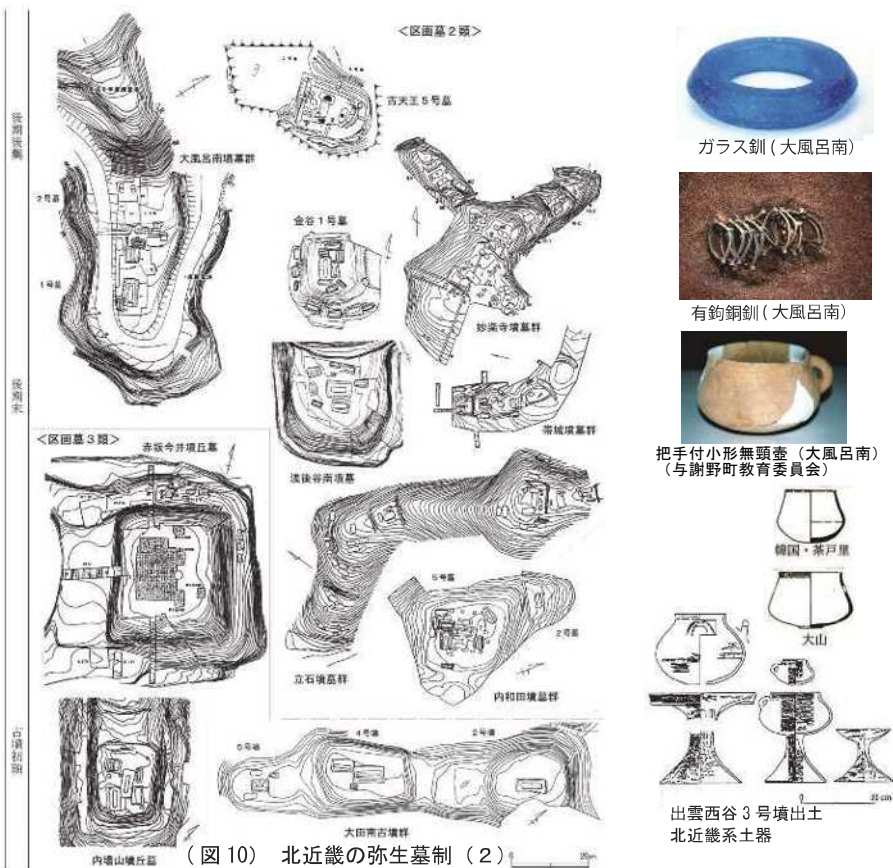
（図4）日吉ヶ丘遺跡の環濠と貼石墓



(図5) 丹後の方形貼石墓とその分布



(図7) 朝鮮半島南東部の方形区画墓



時期	土器編年	丹後	但馬・丹波	因幡	伯耆東部	伯耆西部	出雲		石見・美作・備後
							東部(安城平野・中海)	西部(出雲平野・美作川)	
中期 後期	■日吉ヶ丘S201 ■寺岡遺跡 ■赤井岡1号墓	■志高1~3号墓	■東山墳墓群 ■新井三嶋谷1号墓 ■新井三嶋谷2号墓 ■福山原南平2号墓 ■福山原南平1・3号墓 ■本庄1,2号墓 ■下坂1号墓 ■布勢崎南平1号墓 ■門上谷1号墓 ■西窪見墳丘墓	■阿弥大寺1号墓 ■阿弥大寺2・3号墓	■尾高浅山1号墓 ■阿ノ原1,16号墓 ■阿ノ原1,3号墓 ■日下1号墓 ■仙谷1・2号墓 ■仙谷6・7号墓	■友田B区1~6号墓 ■友田A区墳丘墓 ■九重3号墓	■中野美保2号墓 ■青木4号墓	■政東A区2号墓 ■赤井池墳墓 ■牧田谷1号墓	
後期 前期	■三坂神社1式 ■三坂神社2式 ■三坂神社3式 ■大山1式	今市墳墓群 三坂神社3号墓 左坂26号墓 左坂18号墓 大山墳墓群 玉峰墳墓群	梅田東1,17号墓 門谷墳墓群 土屋ヶ鼻墳墓群						■朝庵1号墓
後期 中期	■大山2式 ■大山3式 ■大山4式(黒プレ西谷)	古天王4,5号墓 伏魔宮南1号墓							
後期 後期	■西谷1式	(赤正坂)	妙楽寺墳墓群	門上谷2号墓	後口谷1,2号墓 ■宮内2号墓	■東見1号墓 ■神山寺9,10号墓 ■坂津山6,10号墓	■西谷3号墓 ■西谷2号墓 ■西谷4号墓		
後期 末期	■西谷2式 ■西谷3式	西谷1,2号墓 西谷谷南墳墓 安谷1号墓 大田南4号下層 赤坂寺井墳丘墓	立石墳墓群 黒田坪墳墓群	■桂見墳丘墓 ■桂見遺跡2,3号墓	■宮内3号墓 ■赤久寺墳墓 ■藤和墳丘墓	■朝金小千ヶ1号墓 ■父原1号墓 ■仙谷4・5号墓	■ウカフE1号墓 ■西谷内1号墓 ■下山 ■安美寺1号墓	■中野美保1号墓 ■西谷6号墓 ■西谷7号墓	
古墳 初期	■漢後谷1式 ■漢後谷2式	白米山北古墳 内和田5号墳 大田南2号墳 大田南5号墳	内嶋山墳丘墓 黒田古墳 若木古墳 広家15号墳 森尾古墳	■赤谷1号墓 ■桂見1号墓	三度舞大石塚	■徳楽方墳	■宮山IV号墓 ■小庭谷3号	■三田谷1,2号墓 ■土井砂1号	■矢谷M1号墓
古墳 前期	■(黒ヶ鼻式) (愛宕山式)	大田南4号墳 愛宕山2号墳 白米山古墳		■美和32号墳 ■桂見2号墳		■普段寺2号墳	■大庭古墳 ■道山1号墳 ■塩津山1号墳	■神原神社古墳 ■松本1号墳	

(図11) 日本海西部沿岸域の弥生墳墓の併行関係(高野2015)

参考資料

開連遺跡の弥生時代年表					
年代	弥生前期	弥生中期	弥生後期	古墳時代	中世
1000	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期
700	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期
400	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期
100	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期
紀元前	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期
紀元後	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期	西川原遺跡 ・弥生前期 ・弥生中期 ・弥生後期

日本列島で水田稲作の生活を基本とする弥生時代の始まりは、AMS年代測定により、紀元前10世紀後半に遡ることが分かれています。地域により弥生文化の浸透は異なりますが、九州北部では紀元前10世紀後半、中国・四国地方は紀元前8世紀前後、近畿地方では紀元前7世紀前後と考えられています。

※AMS年代測定

AMSとはAccelerator Mass Spectrometryの略で、加速器質量分析を用いた炭素年代による高精度年代測定法（AMS法）です。

炭素年代の測定は、炭素を含む有機物が死滅すると同時に、同位体元素の炭素14がβ線を出して崩壊をはじめ、およそ5568年（正しくはおよそ5730年）で半分の量になるという原理を利用しています。

試料（例えば、植物遺存体、土器に付着する煤・焦げ等）の炭素14の量を測定して年代を割り出します。1mg程度の微量な炭素量があれば実施でき、測定値自体は±20年、少なくとも±100年の誤差の範囲内で示せるようになっており、現在でも大きな進展を遂げています。

令和 7 年度 島根県埋蔵文化財調査センター講演会資料集
『王墓への道・弥生墳丘墓成立の謎に迫る・』
発行日 2025（令和 7）年 11 月 29 日（土）
編集・発行 島根県埋蔵文化財調査センター

